忍の末裔が呪術師になるようです

H—13

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪術廻戦の世界にうちは一族（ほぼ壊滅）をぶち込んでみました。

総合的な強さはスタート時点で五条先生＞オリ主位で見てください。領域展開、反転術式習得の差が出てます。

ついでに言うと原作把握推奨です。

??チャクラではないと説明出来ない部分あるかもしれませんが全部魔法パワー呪力君にして説明してます。同じようなもんだろ（暴論）

目次

私有地に出て来た妖怪討伐したら変な人が家に来た ―― 1
入試遅れてもここから入れる保険があるんですか!? ―― 6
オリ主＋α設定 ―― 11
同級生がパンダとおかかとツンケンしてる子だったお話 ―― 15
みんなで楽しい体育のお時間。 ―― 20
無下限呪術ｖｓ万華鏡写輪眼 ―― 26
東京都立呪術高等専門学校
終わりの始まり ―― 32
特級過呪怨霊祈本里香 ―― 36
陰陽・前編 ―― 39
陰陽・後編 ―― 44
逢魔が時 ―― 50
六道仙人 ―― 53
呪術廻戦
まったり春の日差し。恵君を添えて。 ―― 59
幕間 ―― 62
1年生と顔合わせ出来たけど1人死んでるってマ? ―― 67
前触れ ―― 71
勝手にＱ＆Ａシリーズ ―― 77
交流戦① ―― 79
交流戦② ―― 82
交流戦③ ―― 85

私有地に出て来た妖怪討伐したら変な人が家に来た

２０１６年８月■□日。三重県○△市⁇※山の山頂にて『窓』が特級相当の呪霊を確認。任務として五条特級呪術師に要請。
到着予定時刻よりも三十分程早く、莫大な呪力反応を山頂より確認。
五条特級呪術師が現場に到着した時には戦闘は終了しており、溶解し硝子と化している地面とそれを両断する様に地面に深々と付けられた斬撃痕のみが確認された。
残穢から判断し、地面を溶解させたものが『窓』が確認した呪霊と判断する。現場の状態や神域に等しい座標から鑑みてこの呪霊を「特級火葬神霊アマテラス」と仮称する。
上記の特級神霊を祓った者の残穢を調査した所、未登録の呪術師と断定。過去の未解決の呪詛師案件の事件の残穢とも照合結果が合わなかった為犯罪歴は無しとし、継続調査をするものとする。

――ぴんぽーんっ。

山沿いの木造の一軒家。田舎特有の地主の屋敷のような都会では豪邸扱いされる家のチャイムを押したのは、胡散臭い目隠しをした白髪の男。それを出迎えるのはエプロン姿の高校生。
「はーい!……えーと、どちら様?」
「君が千葉巡（めぐる）君かぁ。君、呪術高専に入学する事になったから」
田舎では無いが、よく訪ねてくるのは顔見知りの爺さん婆さんと高校の知り合い位である。久しぶりに遭遇した初対面の相手は、伝えていない名前を把握して意味のわからないことを言ってくる胡散臭い人だった。よく顔を見ればヘラヘラして芯が無いように見えて一本

軸がしっかりしていたり、常人とは違う様な雰囲気をヒシヒシと感じてしまう。
無性に逃げ出したい気持ちになってしまったが今日は休日。街中で会ったなら逃げられたがここは実家。それに、心当たりはあった。
「……とりあえず、お茶飲みます？」
返事を聞く前に元々居た台所に戻り火を消して、来客用と自分用の湯呑みを取り出す。玄関で待っているのかと思ったがなんにも言わず勝手に居間まで移動している様子だ。
自由な人だな、と楽観的に考えながらも、先程彼が言った「呪術高専に入学する事になったから」という言葉を咀嚼する。
現在巡は１７歳。普通の高校に通う現役高校生である。来年には大学受験も控えているのに何を言うのかと疑問が尽きない。
「お待たせしました。羊羹くらいしか無かったけど良かったら食べてください」
「悪いねぇ～。あ、僕は五条悟。よろしくぅ。君が高校２年生ってのも、経歴に不審な点が無いことも確認済みだけど、８月■□日に帳も降ろさないで「特級火葬神霊アマテラス」を祓っちゃったのはダメだったね。場所が場所だったから上層部が騒がしかったけどそれは僕の権限で黙らせた。でもこのまま一般人で居れば厄介事は免れられない。君の選択肢は多くないよ　？」
ぐだぁっと長い脚を伸ばし畳の上でダラける五条悟と名乗った男の目の前に茶と茶菓子を置く。彼が名乗りながら雰囲気と同じように緩く手をふらふらと振る仕草を見せたかと思えば、一瞬で空気が重たいものに変わる。必死に眼を切り替えないように務めながら、目の前の男を真っ直ぐに見つめる。
目で語る一族。それが父親から言い聞かされて来たことだ。敵対すると決まった訳では無い上に、相手は厄介事を一つ以上片付けて来てくれているのが今の言葉で分かる。無下にはできない。
「……両親に会って話していただけますか。決定はそれからでも遅くないはずです。」
「良いよ～。」

絞り出すように出した言葉に被せるようにされた気の抜けた返事に、拍子抜けして頭から倒れそうになる。
「さっきの緊張感は…？」
「いや、一応事実だけは言っとかなきゃでしょ？それに抵抗されたら僕でも面倒臭いって思うくらいには強いでしょ君」
「初見でよくそこまで分かりますね、五条さん？」
「五条先生で良いよ～。僕"も"眼に自信はあるからね。術式も中々見ない面白いもの持ってるし特筆すべきはその眼かな。良かったら見せてよ。僕の六眼でも霧がかってて全部は見えないから。」
目隠しを取った下には綺麗な蒼色とも翠色ともとれる宝石の様な瞳があった。目隠し外せば胡散臭さが少しは無くなるだろうと思っていたけれど、あえてそれを付けているのにも納得した。それに、その効果も。
「術式？とか一目で看破出来る魔眼ですか。いや、それだけじゃ眼の格が高過ぎませんか？……本来見せ付けるようなものでは無いんですが分かりました。バレてる人に隠してもしょうが無いので…」
「六眼も知らないでここまで力着けてるの、中々の天然記念物じゃない君？」
真っ黒の瞳に朱よりも深い赫が混じる。クルクルと回るように勾玉型のモノが三つ組み合わさったようなモノが浮かび上がれば、魔眼が完成する。
呪術高専もさっき知ったんだから情報疎いの分かってるだろと愚痴のように心の中で思いながら、確認のような形で説明を始める。
「これが一応俺と父さんが持ってる写輪眼って名前のやつになります。基本的には動体視力の向上とか色々あるんですけど見た人の呪力の量とかを大雑把に把握したり目を合わせた相手に幻術を掛けたり出来ます。」
話しながら簡単な実践として周囲の景色をあの日のものにする。
――尻尾が５本生えた獣人のような見た目をした化生　。僅かに浮いているものの、足元から円状に融解させる程の高温をその身から発している狐女。対峙するのは瞳の紋様が写輪眼と似て非なるもの

となった千葉巡　。彼を護るように骨が、肉が、皮が上半身のみではあるが巨人を形作る。両手に剣、顔部分は天狗のようなお面を付けた半透明のソレは、右手に持つ剣を振り上げる。

『天叢雲剣』

最初で最後の一撃。妖狐も無抵抗な訳では無く、はっきりとそう口にした。意思疎通の取れるであろう凛とした、それで居て禍々しい星を降らす神の力。

『禍音星落火流錐』

拮抗は数瞬。最初から断たれていたかのように真一文字に全てが斬られた。堕ちてきた星も、妖狐も、地面も諸共に両断される。アマテラスと名づけられるソレも、その呪力で形作られた星も、不自然に溶けていく　。――――――

本来と違う崩壊の仕方に流石の五条悟も目を見張るが、原因は時間が教えてくれた。

巨人の持つもう一対の剣。掲げられたそれに吸い込まれるようにして特級神霊が姿を消したからだ。

「見せてくれたって事は説明してくれるってことで良いのかな？」

いつの間にか周囲の景色は家の中。完全に目隠しを外した彼の疑問には、瞳の紋様を変えることで応じる。

「万華鏡写輪眼。それがこの目になります。基本的には写輪眼の強化版という認識で大丈夫です。あの巨人のような技ですが、須佐能乎という呼び名で呼んでいます。心の鎧、闘志が形創ったモノ、らしいです。」

片目毎に固有の能力がある事は伏せ、更に繋げるように話すのは巨人が持っている剣について。

「あの呪霊を切ったのが天叢雲剣、倒した呪霊を純粋な呪力として吸収したのが布都御魂剣になります。文献によると固有武器であり須佐能乎使用時に使える様になると。」

「へぇ。それに、まだまだあるんでしょ？僕の六眼より便利そうじゃん。」

「眼のオンオフが出来ない五条先生のよりは良いかなとは。」
段々と、心は許せてきた。然し、これ以上の瞳力があると看破するその眼に畏怖を抱く。あらゆる初見殺しを既知のモノとする彼の瞳は、コレと同等の力を持つと認識した。

「五条先生は、呪術界での強さはどの程度ですか？　貴方みたいなのがゴロゴロ転がっているのなら、俺は鍛え直さなきゃいけない」
「ん？言ってなかったっけ。僕はさい　「帰ったぞ　、巡（巡〜。ただいまー）」　あ、ご両親かな？ならちゃっちゃと行ってきまーっす。」
一番の疑問が中断される。目の前にいた教師が一線級、ソレも最強とは思っていない巡は、五条悟が呪術師の当たり前だと思ってしまう。特級呪霊がどの位の等級なのかも分からないまま、これが当たり前だとする勝手な認識を改める為の質問だったが、それは畑に行っていた両親の帰宅により遮られた。
流れる様な身のこなしで止める間もなく玄関に向かっていった彼の背中を見ながら、両親の性格も鑑みた上で今夜のおかずを1人前多くしておく必要があるだろうなと考える千葉巡であった。

入試遅れてもここから入れる保険があるんですか!?

結論から言うと17歳にして高専に入学する事になった。実質的には18歳の高校1年生である。字面だけ見ればおかしいことこの上ない。

高専3年からでも良い実力では合ったが、家系や生い立ち的に呪術界に疎いと判断されたためだ。五条先生曰く

「青春がちょっと伸びたんだ。気にせず気楽に行こうよ。」

巡の両親は昨晩多くのことを五条先生と話していたらしいが、巡自身は参加しなかった。

改めて強さの基準として彼の自己認識を聞いたところ、当たり前の様に最強と返され、それを巡の目で真であると判断を下したからだ。

本来手本とすべき父から小学生のうちに勝ち星を拾い始め、中学に上がる頃には完全に追い抜いてしまった。体術も、呪力量も、術式も……

故に呪霊(?)の溢れる山に踏み込んだ。私有地故に人気も無く、知らない者は入り込めない場所だ。

天照大御神の御膝元。神域の類いの場所に居るモノがただの呪霊な訳は無いが、そんな事を呪術界に疎い巡が知る訳もない。ついでに言えば神霊もよくわかっていなかったりする。ただ知らないだけなので、学べば覚える程度の頭は備えてある。

自力で鍛える術を身につけ呪霊相手に経験値を積むも、その伸びの頭打ちを実感したのは五条先生が家に来た原因の戦闘だ。

見た目より接戦であり、相性が悪ければ食い殺され取り込まれたのはこちらであったが、それは万華鏡写輪眼のままだったらの話。縛りにて現在は封をした状態であるが、解放してしまえば直ぐにかたが着いてしまう。そのレベルの力を身につけてしまった。

「最強に学べるならば。」

狭い世界に居るよりも、もっと広い視野を持つ。このまま自己鍛錬を畑仕事の傍ら勤しんだとしても、これ以上は容易に上がらないと薄々感じてしまっている。それを一言伝えて寝た朝。父親から家宝

を手渡された。
「巡、お前はオレよりも強い。オレから伝えることはとっくのとうに尽きていた。今からお前が千葉家当主だ。家はオレと母さんが死ぬまでは護っている。好きに帰ってこい。」

「それ特級相当じゃん。家宝が呪具なのウケる。」
　五条先生の茶化しの様な言葉を無視して、柄を握る。ズッシリとした重みに、傷一つ無い姿に武具としての存在感を感じる。瓢箪型の扇状のモノであり、唯一無二の形状を晒している。
「瓢摩（ひょうま）と云う。我らが祖の武具の一つと言われている。攻撃自体の吸収、反射と不変の力を持つという。餞別だ。持っていけ。」
　まだ行かないのに気が早い事だと苦笑いしながらそれを受け取っておく。高校にはもう行く意味が無いからと、退学の意向を示さないとな。
「お邪魔したねー。じゃ巡、４月に迎えに来るから」
　家宝伝承までしっかりと見届けた五条先生は、迎えも来ない朝早い時間から帰ると言い出した。玄関先まで家族３人で見送りに行けば、そう言いながら両手を組み、消えた。
　消えたというのは少し違う様に感じたが、写輪眼を開いていなかったからかそれ以上は分からなかった。
　ここからが楽しみだと、壮絶な笑みを浮かべながら　両親に断りを入れて山の中へ風のように走っていった。いち早くこの呪具に慣れる為。４月が余程楽しみな様子に両親は微笑み、畑仕事に出ていった。毎日山篭りの真似事をしている以外は以前と変わらぬ日常が過ぎていった。

「遅刻!?なんてことしてくれてるんですか!?」
「だいじょぶだいじょぶ。普通に学長と面談するだけだから。遅れて機嫌悪くなってるかもだけどノープロブレム。」

「どーしてこうなった!!!」

絶賛車の中で冷や汗垂れ流してる千葉巡です。おはようこんにちはこんばんは。叫んだらちょっと落ち着いた。そりゃ入学するなら試験とか必要なのは分かるよ？でもこのクソ目隠し今朝の今朝まで黙っていた上に遅れるの確定とか言い出す始末。

「試験ってほら、誰かと手合わせとか。」

「無い無い。巡が力出したら試験官が可哀想だよ。」

どんな理由かは知らないけれど、力がしっかりと認められていること自体は喜ばしい。ただ面接には一切関係無さそうなのが怖いところではある。

「着いたよー。こっちこっち。」

「本当に東京ですか？ウチと大差ないですよコレじゃ。」

【東京都立呪術高等専門学校】。東京の名前を使うなら都会らしい都会に出来なかったのかと思いながらも、秘匿性を考えれば合理的だとその点だけは頷けた。

土地勘なんてものは無い未知の土地。遅れているがマイペースな五条先生の後をついて行かなければいけないもどかしさを言葉ごと呑み下し、その後ろをついて行く。手ぶら故に身軽であるが心は既に暗い。

「此処ここ。ささっと、入った入った。」

文句の一つでも吐いてやれば良かったが、そんな事より謝罪と手土産の一つでも渡さないと――。後者は賄賂に間違われても仕方ないタイミングではあるが、現状が現状。自分自身が元凶ではなくとも、責任の一端はあるのではないかと思う程度には常識を知っている巡だった。

「俺が呪術高専東京校の学長をしている夜蛾正道だ。千葉巡、お前に聞くのは一つだ。何故呪術高専に来た。」

……面接って何だっけ???

扉を開け真っ直ぐに見据えた先に居る学長から投げかけられた言葉に、そう純粋な疑問を持ったものの、本質を突く簡潔で良い質問だと思い直す。
「俺が最強になる為だ。呪術界の事も据も興味は無いが、井の中の蛙になる前に見つけ出されたのは運が良かったと今なら思う。弱者は意を突き通せない。どの世界でも本質はそれだ。だからこそ取捨選択の余地は失いたくない。……かな。」
「僕の前で言うねぇ。やるかい？」
「茶化すな悟。お前と巡が本気でぶつかれば地図を書き換えなければいけなくなるぞ。良いだろう。夜蛾正道の名において千葉巡の入学を許可する。悟、案内してやれ。」
「はいはい。ということで、だ。寮行くよ寮。」
だだっ広い敷地内に立つ男子寮の一室。木造で古そうに見えるが、意外としっかりしており綺麗な部屋だった。布団ではなくベッドだったことだけが不満点ではあったが、巡は早速家から持ってきた衣服やら嗜好品やらを"眼"から取り出して並べだした。
「車の中で聞いたけどほんとにあるんだね、異空間。」
「戦闘には使えないんで、収納スペースになってますけどね。」
瞳に映る紋様は手裏剣を捻じ曲げたような特殊なモノ、万華鏡写輪眼。開眼すれば固有能力が宿るとされている。巡が持つ能力は「天香山命（アメノカグヤマ）」と「月読」の二つ。対人戦において無類の強さを誇る初見殺しと、異空間に繋がる瞳からあらゆるものを出し入れ出来る能力は派手では無いが凶悪である。
五条悟からすれば便利程度ではあるが、呪具を常に持ち歩かなければいけない者が自由にモノを出し入れ出来る異空間を持つ利点は凄まじい。手が空いたままでも戦闘を行え、尚且つ情報を削ぎ落とせるのだ。呪具をいくら取り換えても邪魔にならないおまけ付きである。
「はい、この辺りの地図と、関係者の資料。ついでにどんな事やるかとか纏めといてくれたみたいだし読んどいてね～。じゃ、ごゆっくり！」
「分かりました。明日でしたよね、入学式というかなんというか。」

「そうだよー。巡含めて男3人、女1人。合計4人だよ。」
「すっくな!?」
「呪術界の人手不足を表してるでしょ?あ、そうだこれこれ。学生証渡しとかなきゃ。とりあえず強さは僕の折り紙付き。実績も充分。でもまだ子供だ。上の連中にちょっかい出されないように二級スタートにしておいたからね。せっかくの青春、山に篭ってないで楽しみなよ。巡ならすぐ一級まで行っちゃいそうだけど。」
「……ありがとうございます。」
目の前の大人からの優しさ。どれだけ強くとも巡はまだ未成年だ。それがまだまだ悔しくもあり、嬉しくもある。五条悟が去った後、夜まで敷地内の端から端まで見て歩き、早めに就寝した。
思ったより疲れていたのか、思いの外直ぐに寝息を立て始めた年相応の彼の姿が、カーテンの隙間から覗く月に照らされていた。

オリ主＋α設定

千葉（ちば）　巡（めぐる）

性別：男

年齢：２０１７年６月に１８歳

誕生日：６月９日

容姿：黒髪長髪黒目で、線は細め。

身長体重：１８３ｃｍ／７８ｋｇ

制服：袖口を広めにしているくらいで殆どベースと変わらない。背中に大きく家紋を入れ、首元にはシンプルなネックレスをつけている。

等級：一級呪術師（２年時点）

術式：六道呪術

術式内容：五大属性＋陰陽遁

万華鏡写輪眼の紋様：手裏剣を捻じ曲げたような形

須佐能乎：青白い色、侍のような服装

簡単な設定

・忍術という名前の呪術を扱う一族であり、忍として戦国時代辺りには大名に仕えていた。合戦に敗れ、領地を奪われたり色々あって一族がちりじりになる。現在は苗字を変え、表向きは一般人と同じような生活を送っている。本来の苗字は団扇（うちは）だが、現在では家紋に扇の証が残るのみとなった。呪術界に関わること無く全てを秘匿しながら過ごしており、文献すらも写輪眼以上でしか分からないものを継承している。

・現在写輪眼を開眼しているのは父親と巡の二人のみ。ＮＡＲＵＴＯの世界では憎しみや悲しみで開眼するものであるが、この世界では呪術と同じく有する才能に左右されるため、産まれた段階でどこまで開眼出来るかは決まっていると言って良い。巡は生まれ落ちた段階で三つ巴の写輪眼を開眼し、呪術高専に入学する段階で既に輪廻眼まで扱える才を持っている。父親は産まれた段階で一つ巴、現在三つ巴の写輪眼が上限である。

・団扇家の術式は基本的に属性系のものが多く、特に火属性の術式を持つ者が多く存在したと伝わっている。稀に2属性、3属性を含む術式を持つものが現れるが、例外無く2属性の者は3つ目の固有属性、3属性の者も同様に4つ目の固有属性を併せ持っていることが残されている書物により明らかになっている。巡の場合は5属性＋陰陽遁をもっており、創造、具現化の力を併せ持った術式となっている。他の者の固有属性も陰陽遁を上手く使うことにより再現可能である。

・万華鏡写輪眼の固有能力

右目　　月読：強力な幻術（ざっくり）。目を合わせた相手を空間・時間・質量すらも術者のコントロールする幻術の世界に引きずり込む。拷問により精神に多大なダメージを与えることもできる。。

左目　天香山命（アメノカグヤマ）：実質的に無限大に広がる異空間と現実を繋ぐ役割を果たす。異空間には人以外の全てを納めることが可能である。巡は基本的に倉庫として使っており、異空間内部の時間経過は現実世界と異なり殆ど時間経過が無いと思われる。神威の下位互換的能力であるが、倉庫としてなら上回っている。

・万華鏡写輪眼を発動させるデメリットはこの作品では存在しない。失明をすることが無ければ、須佐能乎の発動に伴う痛みもない。身に余る力を使った場合には反動が伴いうるが、そもそも開眼するかどうかの時点で才能に掛かっている。十全に能力を扱える才能があるからこそ、万華鏡写輪眼を開眼しうる。故に永遠の万華鏡写輪眼の概念は無く、移植なんていうやばいものもない。

・須佐能乎第二段階から使用可能となる固有武器

・天叢雲剣（アマノムラクモ）：呪術や因果、言霊による繋がり、穢れといった概念的なものに対する特攻効果、絶対優先権を持つ。力をある程度扱える様になると取捨選択が可能となる。別名：都牟刈之剣

※２０１６年現在まだ扱い切れず山を両断しかけた。

・布都御魂剣（フツノミタマ）：所有者が祓ったモノ（呪霊等）を純粋な呪力に浄化、変換、保管、還元する力を持つ。基本的に須佐能乎第二段階からの消費呪力のバックアップとして保存されているが、解放することにより

擬似的な呪力の制限解除を行うことが可能。

・特級呪具『瓢摩（ひょうま）』

瓢箪の形をした扇型の呪具であり千葉家の家宝。側面で攻撃を受けると衝撃、性質を吸収して任意のタイミングで増幅して吐き出すことが可能。壊れず、変わらず、造られてからこれまで傷一つ無い耐久力が売りの代物。

領域展開

『月桂無窮天元（げっけいむきゅうてんげん）』

印：巳の印（両手を組み合わせ祈る様な形）

呪術の極致である領域展開。木々が生い茂り、中心には神樹が天を穿いている。見た目でいえばそれだけの世界。

領域の特性を表せば『呪力とは別種エネルギーの満ちる領域』で、すなわち自然エネルギーの満ちる世界。生い茂る全ての木々、草が発するエネルギーは、全ての呪力を中和し霧散させる。呪力をこの世界で発動しようとする事は、異物を撒き散らす事と何ら変わりない。簡易領域であっても同じ事で、自然エネルギー以外の全ては邪魔者である。

引きずり込まれた段階で判定が0．1秒ごとに存在し、失敗すれば人間の形を保って居られずに肉片1つ残らず領域自体に取り込まれ、自然エネルギーを生成する木々と化す。取り込めば取り込むほど規模は拡大して行く。どれだけ呪力があるかではなく、環境適応能力に依存している為意外にも呪力がない方が適応し易い。伏黒甚爾、覚醒後の禪院真希はこの判定が無条件で成功となる。

巡本人も実はこの判定を課される縛りを無意識的に結んでいるが、自我が芽生えて間もない頃より眠っている間この空間に居続けた為か身体が自然エネルギーに慣れている為あってないようなものとなっている。

上記は領域を展開した場合における基礎的な効果であり、必中の効果も当然発動される。

必殺必中の領域展開では無く、ただの必中の領域。その本質は新世

界の具現化。呪力の一切無い自然エネルギーの満ちる世界。その主がどう言った存在になるかは語るまでも無い。この世界では無敵であり唯一の神に至る。

『六道仙人モード』

手と背に黒い杖と玉を形成し、独特な羽織を纏う。そして第三の目、額の輪廻写輪眼を開眼する。それは神樹の輪廻写輪眼とリンクしている。身体の中全ての呪力を自然エネルギーへと入れ替える為の装置が羽織であり求道玉である。無限に等しい自然エネルギーを、世界から直接供給されるというバックアップを受けられるようになる。

領域展開時の限定的な姿であり、解除後は同時にこの姿も解除される。第三の目は閉じるがなくなったわけではなく、縦一文字の跡が額に刻まれる。

同級生がパンダとおかかとツンケンしてる子だったお話

――夢を見る。普通の夢と違うのは、同じような場所に数え切れない数来ている事。

空間の真ん中には天まで貫こうとする1本の木。最初は小さい小枝程度の芽だったのに、自分が成長すればする程に伸びていき、今では木と言っていいのか分からないほど幹が絡まり合い先端に大きな膨らみを付けている。

あれが開花する時、何かが起こる。漠然とした予感がする。

この世界では全てが自由。可能性は無限大だ。全能感を全身に感じながらも、身体はいつも通りに動かせない。俯瞰的な視点が緩やかに続くのみ。

木々が生い茂り、山があり、川が流れ、生き物以外の生命が巡る世界。

訪れは唐突に。ならば去るのも唐突に。

「(いやー、成長早くね?)」

朝5時半。農家の朝は早い。目覚まし時計も鳴らないうちに起きてしまった巡の頭に過ぎったのは、はっきりと覚えている夢の中身。

生得領域。実家にある文献の中ほどに軽く書かれていたから名前だけは知っている。然し人によって千差万別と書かれていた為、はっきりとそれだと認識できたのはここ最近の話である。

「あれが何か悩んでも仕方ないしな。行くかー。」

肌寒いがそれにも慣れた。ジャージ姿に着替えて、昨日覚えた山道及び運動場で軽いジョギングをする。本来実家の山を走り回っていた身としては体にかかる負荷が少なめではあったが、やらないよりやる方が良いと考え走っていた。

説明されていた朝食の時間までに、シャワーを浴びて着替えて……

とやっていれば、やるつもりだった呪具の訓練などの時間が無かった。明日に回すか、と考えつつ共同食堂で一人朝食を食べる。
少し寂しくもあり、明日からは賑やかになるのかと楽しみでもある。
４人。４人。男子寮女子寮があるから実質３人である。女子の誰か寂しくない？
頭の中は煩いものだが、表情には出さず食器類を片付ける。それを終えて、漸く制服に着替えた。
黒の統一色。胸元には学校の印。袖口は広めで、背には千葉家の家紋である扇のマークを特注で入れてもらっている。所々個性的なアレンジがされているが、家紋以外は五条先生のサプライズである。長い髪はシンプルに束ねられ邪魔にならぬ程度に流している。
「うん、良いな。」
自室の備え付けの鏡に全身を写して見る。動きやすいし、身体によくフィットしてくれている。どこまでの衝撃に耐えうるか分からないが、高位呪霊や昨年相手にした神霊？といった対峙する敵が強ければ強くなるほど、良い服を使っていても無意味であるのは身を以て分かっている。
満足度が高かったので口笛でも吹きながら教室に向かいたいところではあったが、ド下手くそなのは自覚済みなので自重する。
教室の扉を開けた段階で早く来すぎたことを認識した。まだ８時前。横一列に並ぶ座席には誰もおらず、誰がどこに座るかすらも自由らしい。一応写輪眼で呪力の様子を見てみるが何も無く、項垂れる。
昼寝が気持ちよくできそうな窓側の席に陣取り、背もたれにもたれ掛かって目を瞑る。仮眠をする訳でもなく、ただリラックスするだけ。いつ誰かが来るか分からないが、暇でしかない。呪具を弄るような気にもならず、静寂の中で絵になる姿を晒す。
――ガラガラ――パンッ!!
乱雑に教室の扉が開かれる。巡がゆっくりと目を開ける前に、彼か

ら一つ離れた真ん中の席にどっかり座ったのは髪をポニテに纏めた鋭い瞳を持つ女性だった。眼鏡のセンスだけが謎ではあるが、肩に掛けた竹刀入れを見てある程度は納得した。
「俺は千葉巡、よろしくな……？」
「――チッ、真希だ。名前で呼べ。」
……初対面なのに舌打ちと下の名前で呼べ命令は何!?
「えっと、苗字は？」
「禪院だ。嫌いだから苗字で呼ぶなよ。」
「そうか。」

ふーん、としか思わなかった。呪術界の知識が薄く、五条先生が初めての繋がりである巡は、苗字で家系が分かるほどには学びきれて居ない。だからこそ、こうした淡白な返事になってしまった。
「お前、一般の出か？」
「一般かと言われたらそうだな。呪術なんて名前去年知ったばっかりだし。」
「そりゃ知らないわけだ。」
互いに初対面。会話はすぐに途切れる。口上手な方では無い巡と、刺々しく話す真希ではこうなるのも必然であった。

――ガラガラ――。
開けっ放しだった入り口の扉が閉まる音が響く。反射的にそちらを向けば――パンダが居た。
「お、もう居るじゃん。」
「待って喋るの!?」
「手前呪骸だろ、んで喋れてんだよ。」
「呪骸じゃない、パンダだ。よろしく。」
存在自体が謎なパンダは、普通に一番廊下側の席に腰を下ろした。生徒なの!?普通に歩けてるの何で!?聞きたいことは山積みであるが言葉が出ない。それは隣の真希も同じ様子だった。

――ガラガラ――ガラガラ

質問の為に口を開こうとした時、3度目の扉の音がした。しっかりと閉じてくれる辺り仲良く出来そうな良いやつなんだろうな－～と思いながら扉の方を見た。

「こんぶ、明太子。」

「なんて？」

「ツナマヨ。」

黒板に手馴れたように「狗巻棘」と名前を書いて教えてくれたけれども、何が何だかよく分からない。

「いぬまき、とげ、君？」

「しゃけ。」

「ちょっと、視て良い？」

「……しゃけ。」

頷きながら返事をしてくれたおかげでよく分かる。「視る」意味を深くは説明せず、ゆっくりと眼を変化させて行く。驚く様な真希の表情を横目に狗巻君の呪力を見れば、喉、首、肺周りに呪力が集中している。

そのままパンダ、真希を見る。真希は殆ど呪力が無いが僅かにあると言った状態。パンダは核が三つ。生命に近い温かさを感じるからか、少し魅入ってしまった。

「……ツナ。」

「おたまじゃくしみたいだな、それ。」

「んだよその目。説明しろ　。」

三者三様の反応を示したが、狗巻君引いてない？大丈夫？

「うちの家系に伝わる写輪眼って名前の目だ。呪力とか、大雑把だけど性質とか経絡系の穴も何となく分かる。」

「おい何処が一般の出身だ。バリバリこっち側じゃねぇか。」

「呪力とかは知ってたし鍛えてたけど、昔は忍だったらしいし、呪術界との交流も断ってたみたいだから……。」

「んじゃ何だ、さっきの反応も御三家知らないからああ言ったのか？」

「呪術界の知り合いなんて五条先生と夜蛾学長と、皆しかいないし。御三家？何それ。偉い家系？」
――ガラガラドッシャーン!!!
「はーい、パーフェクトストロングガイな五条先生ですよー！……おや、もう皆揃ってるのか。」
最後に現れたのはお馴染みの五条先生。目を隠すように白い包帯を巻き、白い髪をかき上げている。普通に髪下ろして、目元を少しでも見せた方が良いんじゃないかと思う。独特な自己紹介からの登場に、場の空気は完全に五条先生に持って行かれた。
「はいはい。皆一回席ついてね。巡は写輪眼仕舞うこと。じゃぁ僕から一通りみんなのこと紹介してくよ～。」
「魔眼使い、千葉巡。呪術界と全然関わりのない家系の出だけど、去年一人で特級神霊祓っちゃったから僕が上層部黙らせて連れて来ちゃった。この中だと一番強いよ。」
「呪言師、狗巻棘。言葉がそのまま術式になるから普段はおにぎりの具材で会話するよ！内容は……気合いで察して！」
「呪具使い、禪院真希。４級だけど体術に関しては中々のものだよ。」
「パンダだよ。パンダだけど二足歩行するし、喋ったりするけど気にしない気にしない。」
「よし、１年はこの４人。増えるかもしれないけど仲良くやっていこう！担当は僕、五条先生だよ！」

みんなで楽しい体育のお時間。

――午前は座学。午後は武具や体術の訓練＋任務等の呪術師としての活動。

簡単な説明書きにはこう記されていたが、蓋を開けてみれば意外にも未知のものが多かった。

基礎的な高校相当の勉学も扱っていたが、半分以上は呪術に関する専門分野であり、初めて聞く単語ばかりだった。基礎、ということでしっかりと覚えたが、先が少し心配になってきている。

「午後からの体育は二人組に分かれての呪力使用厳禁の体術訓練するから！互いの了承があれば訓練用の竹刀とかの使用はＯＫだけど、怪我だけはしないように！とりあえず真希、巡ペア。棘、パンダペア。これで宜しくぅ！変な癖が付かないようにローテーションで組ませて行くからそこは心配しないでね。」

「「「はーい（おう）（うーす）（しゃけ）」」」

「五条先生、眼はどうします？」

「そうだねぇ。じゃ、授業の終わりに僕と模擬戦やろっか。前見せてくれたやつも直接見たいし、巡の実力軽くだけど測ってあげるよ」

「了解です。」

「巡は眼が術式じゃないのか？」

「すじこ。」

「僕の六眼みたいなものだと思って良いみたいだよ。」

「俺の術式は六道呪術だ。火、水、土、風、雷の五属性と陰陽の力を合わせて六道。得意なのは火かな。規模が大きかったりして周りに被害が及ぶ場合が多くて使い勝手が悪いからあんまり使ってないけど、万能系の術式だね。」

「ツナ、すじこ。」

「校庭がめちゃくちゃになるから今回はその眼だけ使うこと。あ、でも手加減しなくて良いからね。」

「手加減しなかったらどっちみち規模がデカ過ぎてヤバそうなんです

けど。」
「僕が相手なんだから大丈夫でしょ。さ、話してててもなんだし僕先行ってるからね～。」
「あれで御三家の一つの家の当主って……大丈夫か呪術界。」
「ツナマヨ。」
「時間の無駄だ。行くぞ。」
「へーい。２人とも、行くぞ。」
　三十歳近いと聞いたのに廊下を走っていった担任の落ち着きの無さに、先行きが不安になってきている巡である。真希の待たせてても問題無いだろという言葉に全員で頷き、皆んなで話しながら時間には遅れないように運動場に向かった。

「おい、なんで臨戦態勢になると呪力纏ってんだてめぇ。体術の時間だぞ。」
「いや、なんか、癖で……抑えろ～、収まってくれ～。……よく分からないけど抑えられたからヨシ！」
「なんかムカつくな。」
「感覚派だな。」
「しゃけ。」
「いや、なんかこの頃の訓練っていったら実家の裏山で斬り合い殴り合いだったから、戦うってなったら無意識で纏っちゃうみたいで。」
「どんなヤツらとやってたんだよ。」
「ＫＵＭＡとかＩＮＯＳＩＳＩ、あとはＴＡＫＡかな？」
「今のイントネーション絶対違うよな。」
「しゃけ、明太子。」
「あ、巡の実家の裏山ちょっと調べたんだけど、範囲ギリギリだけど神域に分類される事がわかったんだよね。だからその熊とか猪だっけ？普通の動物じゃ無くて、性質的には精霊に寄ってるんじゃ無いかな。知らなかった？」
「普通に大木引っこ抜いて投げてきたり、ソニックブーム撒き散らしながら飛んできてたんだけど……あれが普通じゃないのか？」

「「ぜってぇ違う（おかか）」」
「話せるパンダ居たか？」
「パンダは流石に見かけなかったなぁ。そういや神霊？だっけ。そいつは普通に話してたな。会話って程交わしてないが意思疎通は取れてたぞ。」
「へぇ、珍しいね。神霊だからって説もあるけど今まで記録に無いからね。ちょっと頭に入れとくよ。」
「いつまで喋るつもりだ。呪力抑えられたんだろ。やっぞ。」
「はーい。よろしくね。」
狗巻君とパンダペアは素手の体術勝負。真希さんと自分は武器ありの対決となる。
対面の真希さんは槍に見立てた樫の棒。自分は合わせるように竹刀。
先に仕掛けたのは真希。地を這わせる様に構えた穂先を、真っ直ぐ突っ込むと同時に顎目掛けて跳ね上げさせる――。

受けるは巡。ただ待つのでは無く一歩二歩間合いを図り前へと出ることによってインパクトの瞬間を僅かにずらし、それにより体と棒の間に竹刀を挟み込むことに成功する。
足が止まるのは一瞬。柄を滑らせるように棒を押さえつけながら竹刀が真希の手、詳しくは指を狙う。真剣だったならば指を切り落とすのは片手を使えなくさせる最小限で最大の攻撃。親指を切り落とせたのならばアドバンテージは大きいものとなる。
ただの訓練ではあるが生きる為の訓練である。無論呪霊だけでは無く呪詛師との戦いも想定される。この土俵で真希は負ける訳にはいかなかった。
「な、ァ゛……ろッ！」
狙われた片手を躊躇なく離し、受け流す様に槍を操り支えを無くしてやる。重心は片脚に。腰を、背を動かし、最低限の動きで捻りを加えた身体のエネルギーを脚先へ廻す。地面を切り裂くようなスピードで放たれたのはハイキック。それも一回転のスピードを加えた更

に強いものである。
「よっと。……ははっ、容赦ねぇな。」
遠心力を加えたハイキック。モロに喰らえば昏倒は免れないのは雰囲気ですら伝わる。ならばレンジを狭くすれば良い。受け流された身体を流れに逆らわせず、地面を蹴ってショートレンジへ移行する。遠心力は中心の内側に向かえば向かうほど威力は減衰するからだ。左手を竹刀から離して、向かってくる脚の膝上を二の腕で受ける。凄まじい衝撃に身体を持っていかれそうになるものの、体格差が耐える事を可能とした。槍の間合いでも無く、剣の間合いでも無い。素手の領域へと突入する。
――崩拳一閃　。
真希のガラ空きの腹に容赦無く握り締めた右拳叩き込もうとするが、滑るように間合いを調整される。真希の構えは中国拳法、八極。巡は伝承空手に酷似した構えのまま膠着する。互いに道場等に通っていた訳では無いが、呪具を扱う為に鍛え始めた身体が自然とこの形を取らせていた。
訓練用の武器はそこらに転がり、拾う隙は無し。握る拳と身体が唯一の武器となる。
全身の筋肉を、関節を固める。一つの塊となり、標的を押し潰し吹き飛ばす「猛虎硬把山」
脚の筋力は腕の三倍とも四倍とも云われる。そもそも真希と巡ではリーチが違う。攻撃を食らう前に吹き飛ばし、そこから追撃を行う為の前準備としての「前蹴り」
同時に動けば先に届くのは巡の爪先である。然し真希の攻撃姿勢も普通では無い。顎や鳩尾を穿ち抜く予定であった爪先は真希の肩口にぶち当たり、それは全体重を親指の母子に掛ける事と同等の意味を持つ。
「ッ"ぅ――!!」
禪院真希、左肩負傷。だらりと片腕が垂れ下がり、使えない事を示す。
千葉巡、右足親指負傷。平然としているように見えるが、普通に地

面に足を置けば痛いのは確定の為左脚に体重の大部分を載せているのが負傷の証拠となる。

「はーい、そこまで。巡は呪力無しでここまで動けるなら十分充分。真希も良い対戦相手が居て良かったね。」

「チッ……。」

「焦ることは無い。切磋琢磨して強くなっていけば良いんだ。その為の授業であり、呪術高専だ。」

「(五条先生が真面目で真っ当なこと言ってる……)」

「(しゃけしゃけ。)」

　既に対戦を終えていた狗巻君とコソコソと話していたが、クルッと振り返った五条先生の視線によって口を噤んだ。

「ちょっと痛そうだけどやれるかい？巡。」

「呪力でどうにでもなりますから。……これが見たいんでしょ？」

　押さえ込んでいた呪力を全身に巡らせてから逆らせる。気分転換。くるくると回る車輪は形を捻じ曲げ、万華鏡が姿を現す。

「じゃ、やろっか。」

「手加減無しで良いんですよね？」

「良いよ～」

　――ギュル

　左目周辺の空間が捻じ曲がる。目の前に突き刺さるようにして現れるのは特級呪具・瓢摩。

「これまだ1回も使ってないから試運転させて貰います。」

最強・五条悟　対　未来の最強・千葉巡

　模擬戦で特級呪具を持ち出す巡もイカれてるが、それを笑って受け流す五条悟も五条悟である。それを心地よいと思っているから互いに同類であった。

　絶対術式使用しなくても運動場ボコボコになるだろ。と2人と1匹の心は統一され、模擬戦が始まる前に一段海抜が高い階段の上に上がっていたのに巡が気が付いたのは、模擬戦が終わった後の事であっ

た。

無下限呪術ｖｓ万華鏡写輪眼

改めて家宝であり特級呪具でもあるそれを見遣り、二度三度と素振りの様に片手で、両手で振ってみる。重い。が、良い重さをしている。鈍器として敵を叩き潰しても何ら違和感が無い。軍配にしては巨大で、武器として二つと無い代物故に扱いにはかなり苦労するだろうが、使いこなせれば万物を祓えると云っても過言では無い。

短期戦。それも今日これっきり。呪力量自体そこらの1級術師を容易に凌駕する巡は、それを全身くまなく巡らせて脚に力を込める。先程怪我した親指に関しては呪力でカバーする。慣れてしまえば戦闘自体に支障はない。術式を使わない制限はあるが、万華鏡を封じられていなければなんの問題も無い。

対する五条悟。片目だけは包帯をずらしその蒼い眼で巡を見据えるが、それ以外は普段と変わらぬ自然体を保っている。絶対的な六眼と無下限呪術の抱き合わせを持つからか、戦闘に行くのではなく散歩にいく様な気軽さで一歩ずつ距離を詰めて行く。

「しぃっ" ……!」

先に仕掛けるのは巡。全力を出しても縛りを解いたとしても届くかどうかの相手。一度の踏み込みで足元の地面が沈み込み、陥没する。それ程の脚力。呪力を使わぬ先程の攻防とは全くの別ものであり、遠目から見ている3人ですら残像が見えるレベル。

呪力を纏わせた特級呪具。その威力は計り知れない。それを遠慮無く、下からすくい上げるように叩き付ける。余波で地面が捲れ上がり砂埃が舞う。

「お〜。良いパワーだ。先にこっちの確認しちゃおうか。」

微笑むように柔らかい顔のまま、何事も無いように立っている五条先生の姿には流石に面食らう。片手すら動かさず身体から数センチの距離で特級呪具は止められている。

特級呪具に遠慮無く呪力を込めた攻撃は、2級呪霊ならば容易に存在ごと消し飛んでいる程なのに防御が出来る前提で動いている。出来て当たり前。最強と言う言葉が比喩では無いと改めて戦慄を覚え

る。
　無造作に放たれる拳一閃。先程の言葉の通り呪具で防御出来る前提の場所へ、腰も使わず放たれる。見た目に惑わされてはいけない。呪力を最適に纏った拳はそれだけで禪院真希の拳を凌駕する。
　意図を理解した巡は、扇を引き寄せ側面で拳を受ける。少し位は衝撃が手に伝わってきても良さそうではあったが――ふわりと衝撃全てが無くなった様に、呪具に拳がただ置かれた。そんな感覚を味わう。
『――うちは返し』
　柔らかく押し返すようにして呪具を動かしながら真価を発揮させる。爆発する様な衝撃が迸る。五割増程度か、それがこれだけの動作で放った本人へと襲い掛かる。
「けほっ……。面白いね。衝撃と一緒に呪力まで吸収して増幅するのか。僕の攻撃の威力が高くなれば高くなるほど、カウンターの威力も高くなる、と。これだけで何でも祓えそうだけど、僕に対する有効手段にはならないよ。」
　再度舞い上がった土煙に噎せながらも一切こたえた様子の無い姿が現れたと思えば、呪具に関する感想を述べられ、加えてサラっと武器にならないと宣言される。
　これ以上の呪具などそうそう無いのだが、評定された呪具は出したばっかりではあるものの眼の異空間へと再度仕舞われた。
「引き出しまだあるでしょ。ほらぁ、ほら。」
「言われなくとも!」
　これは模擬戦、殺し合いでは無い。故に真正面から突撃する。先程の謎バリア（？）がある故に適当な攻撃は無意味。故に意識を引き付ける。内に、内に。こちらの攻撃は当たらずに、然し五条先生の攻撃も出を押さえて防ぎ、無理ならば捌く。
　互角に見えるが当たり前ながら防御しなくて良い方が圧倒的に優位である。巡も動きの先読みを行い食らいついては居るが限界はあるもの。
　大きく弾かれ体が後ろに流れた巡に、五条悟が追撃を仕掛ける。模

擬戦も五条先生が圧倒するだけして終わりかと遠目で見ている3人は思ったものの、五条先生の脚が止まり膝を着いた時点でどよめきが起こる。
「何やりやがった。」
「おかか。」
「まだ隠してたものがあったのかもな。」

『万華鏡写輪眼・月読』。真正面から使ったところで無意味だと最初の攻防で悟ったが故の不意打ち。だが巡の表情は驚きと半分の呆れに染まっている。
「何で先生幻術空間で抵抗出来るの？初めてだよちゃんと縛れなかったの。」
「多分この眼のお陰かな。術の本質を見るだけで見抜ける。だから抜け出せた。」
　時間も五感も支配した世界へと幻術をもって引きずり込む千葉巡最強の幻術。杭を二、三本身体に突き刺してやった上に痛覚を増幅させていたから膝を着いたが、本来ならばそれだけでは終わらない術の筈だった。全ては五条悟が規格外故の攻略法。
　武具も使えず、幻術も対策されてしまった。ならばもうこれしか無い。

「ツナ、マヨ……」
「……天狗かありゃ。」
「ヤバいな、本気かどうかは兎も角、破壊規模がダンチになるぞ。」

　――骨が組み上がる。上半身だけの青白い巨骨。次に筋肉。筋が巻き付く様に肉付きを施し最後は衣服を纏う。風にはためくような長めな陣羽織に天狗のお面。両腰には直剣が2振り携えられ、内側には巡が取り込まれ護るように肉体が鎧として覆っている。全てが呪力で形作られた万華鏡写輪眼の第三の能力がここに姿を現す。
『須佐能乎・第三段階』

「これが最初から見たかったんでしょうけど。まだ制御出来てない部分もありますよ！」
「直接見るの初めてだけど凄まじいね。ふふ、僕最強だから気にしなくていいよ。」
愉しそうに笑いながらそんな事を生徒が気にしなくていいと安心感を持たせるように云う姿は、最強に相応しい。
剣が引き抜かれる。豪華な両刃の直剣と、片刃のシンプルな直剣。斬り捨てる為だけに創られた愚直さと神聖さを兼ね備えた剣を上段へと構える。
天叢雲剣の固有能力は「存在の絶対優先権と取捨選択権」
どれだけ硬い防御があろうとも、どれだけ鋭い攻撃があろうとも。正面からぶつかれば全てを切り裂き押し通すのがこの神剣の理である。
それは無下限という存在にも例外なく有効である事は、五条悟が攻撃を食らう直前に本日初めての回避行動に出たことにより明らかとなる。
髪の毛数本ながら切り落とされて空を舞う。無下限を攻略したことを示す証。これがどれだけの功績かを巡本人は全く理解していない。黒縄、天逆鉾。片手の指の数すら満たせない無下限への対抗手段。それが今一つ追加された。
（これを持ち出してやっと勝負になり得るってヤバいだろ。）
正直な心の内面である。正直最強の存在をなめていた。自惚れていた。それを自覚する機会は今しかない。
『術式反転・赫』
凄まじい程の呪力が指先に集まるのが見える。蒼い眼を見て理解した。これが最後。最強の力の一端を受け止めてみろと。
「上等！」
陣羽織の上に鎧を纏う。戦国時代の甲冑の様な強固なもの。生徒に放つ威力の技では無いと呪力の規模から把握するものの、逃げるという選択肢は無かった。
心の鎧。心の剣。それが須佐能乎である。腹の底から裂破の声吐

き出しながら前へ。その瞬間、凄まじい衝撃が須佐能乎を襲う。仮面は吹き飛ばされ鎧は軒並み崩壊。骨と僅かな筋が残った骨のような姿に逆戻りしてしまった。然し一つの成果は形となって現れる。

千葉巡、無傷。

その代償として須佐能乎を破壊された衝撃にて、片膝を突くのは巡となる。溶けるように骨は虚空へと消え、周囲に撒き散らされていた闘志も立ち消える。

模擬戦故の決着。殺し合いならばやりようもあったが、これは力量を測るだけの試験みたいなもの。それだけの為にしては足元がボコボコになり過ぎだと思いながらふらっと立ち上がる。

「まじやばいっすね、先生。威力イカれてません？」

「巡だって大概でしょ。語彙力無くなってるよw」

「ああそうだ、オマエら一体何を考えている。」

――ゴッ！ゴッ！

ハイタッチをして肩を組む上機嫌な2人の背後から言葉と共に落とされる拳骨は二つ。脳筋学長こと夜蛾学長である。そのまま五条先生はプロレス技で締めあげられながら連行されて行った。痛ってぇたんこぶ絶対出来るわコレ。

「真希、巡。時間あるし保健室行っておいで。」

首根っこ引っ掴まれている情けない姿の五条先生からのお達しの通り、パンダと狗巻君と一旦別れて二人で校舎内にある保健室へと向かった。

「肩大丈夫？」

「問題無い。それよりなんだその写輪眼とか云う眼。あのバカ目隠しの術式貫通したなんて聞いた事ないぞ。」

「俺だって須佐能乎あんな簡単にぶっ壊されたの初めてだって。幻術もレジストされたし、やっぱ五条先生ヤバいな。」

「そのスサノオ、ってやつも大概だろ。そういやあの剣だけが攻撃通ってたな。」

「天叢雲剣っていってな、えーと。いつも感覚で使ってるからあれなんだけど……存在の優先度を強制的に天叢雲剣の方が高い様に設定

してぶつけ合わせるから結果的にこっちの斬るって結果が優先される……って感じ？」
「ちゃんと把握しとけよ。」
　ご最もである。
「それで？お前今等級幾つだよ。私は四。」
「確か二かな。」
「はぁ？」
「五条先生が青春長引いたんだからその分楽しみなよーって。わざと下げたみたい。」
「納得したわ。うちの連中束になっても勝てるか分からねぇやつが二級程度な訳ないからな。」
「御三家ってみんなその位なの？」
「あのバカ目隠しを基準にすんな。五条家なんてあいつ一人で成り立ってるからな。」
　思ったよりも御三家は名前だけの存在なのか。実力社会は変わらずとも、世襲であったり古臭い信仰のようなものが残っていてもおかしくない。伝統と云えば聞こえは良いが古臭い、時代遅れと言われても仕方のない事。そう考えると思ったよりも狭い世界なのかもしれない。

東京都立呪術高等専門学校

終わりの始まり

２０１７年６月某日。呪術高専東京校

五条先生はサプライズ好きだからこそ黙っている様だが、情報は命だ。巡は何処からか仕入れて来た情報を、一緒に歩いて教室に向かう３人へと適当に喋る。

「今日来る転校生、というよりも転入生か。乙骨憂太、１７歳。俺も高一の年齢じゃ無いが仲間が来たか。」

「同級生を四人ロッカーに詰めたんだと。」

「ツナマヨ。」

「殺したの？」

「いや、重傷らしい。」

「生意気ならシカトしてやろ。」

「人数少ないんだから仲良くしてやりたいはやりたいんだけどな。……まぁ会えば分かるだろ。」

「年長者の余裕か？一昨日くらいに１８歳になったもんな。」

「辞めてくれ、ちょっと気にしてるんだから。」

ロッカーに同級生を詰めた。それだけで評価がマイナスになる狗巻と真希ではあるが、パンダは根本から違うからかあまりそう云う雰囲気ではない。

巡自身良いイメージは無いが、年齢的に何かしら引っ掛かる。精神的に未熟であり術式や呪力を暴走させてロッカーに詰めたにしては、事件を起こした年齢が高過ぎるのだ。

事件が起こった過程に行われた何かしらに関しては情報が無いため判断がつきにくいものの、本人を確認してからでも遅くないと評価を一旦棚上げした。

午後、呪術実習前教室にて。

「転校生を紹介しやす！みんな、テンション上げて！」

「いえーい。って、……言おうぜ一応。」
「巡ナイス。上げてよ3人。」
しら～～～～～～～～
「随分尖った奴らしいじゃん。そんな奴に空気作り？御免だね。」
「しゃけ。」
「……。」
「はぁ。……ま、いっか。――入っといで!!」

五条先生が乙骨憂太を呼んだことで直接見れると巡はゆっくりと眼を閉じる。その身に宿る写輪眼は闇夜ですら見通せる。この特性から瞼の裏側からでも問題なく呪力を見通し得ると判断した結果だ。

がらッ、――カツン。
噴き出す"敵意"と"威嚇的殺意"。沸き立つ諸悪の根源は、乙骨憂太本人ではなくその背後に居るナニカ。
莫大で邪悪な呪力がそれを後押しし、判断がし辛い意ではあるがそれを見分けてくれるのが写輪眼である。
『制御が出来ていない』
『乙骨憂太本人に敵意は無い』
この二つが確定した段階で動く気は無かった。五条先生が連れてきた者が厄介者なのは確定として、根本には有能な人材の発掘、また若者の青春を邪魔させない。この二つがあるのはこの二ヶ月弱でよく分かった。だからこそ今すぐに動く気は更々無い。
「乙骨憂太です。よろしくお願いしま～～～ッ"!?」
だがこの観察眼を全員が持っている訳は無い。
薙刀の刃を剥き出しにして黒板に突き刺す禪院真希。
拳にお手製ナックラーを付けて構えるパンダ。
ネックウォーマーに指を掛け、何時でも呪言を発動させることが出来るように構える狗巻棘。
事前情報を持っていて呪術高専で受け入れた原因である五条先生は、壁に背を付けたまま傍観の構えだ。圧倒的な観察眼を持つ巡です

ら、席に座ったままながらも何時でも戦える様な形を保っている。
真希が吠える。五条先生が今更ながら高専の説明をする。全てはこの人の説明不足であると全員が察した。
６人中４人が臨戦態勢と云うある程度ピリピリした現状を変えたのは、五条先生の気の抜けた一言であった。
「あ、早く離れた方が良いよ。」
「「？」」
《ゆ゛う゛たを゛を゛……虐め゛る゛な！》
黒板から飛び出す様に巨大な両手が現れ真希の呪具をむんずとわし掴む。焦りながらも静止を行おうとする乙骨憂太の言葉を一切聞かないことから、『制御が出来ていない』ことと『乙骨憂太の意思に関係なく乙骨憂太を守護している』ことのふたつが理解出来た。
「下がってろ。怪我するぞ。」
眼を開いた巡の周囲には、肋骨の様な骨と腕のみの『須佐能乎・第一段階』が完全顕現された。乙骨憂太の云う『里香ちゃん』という呪いの両腕を須佐能乎の両腕で受け止め、そのまま押し留める。
守護する目的とはいえ、危害を加えようとするならば防御はするべきである。ただし徹底して押し留めるのみ。危害を加えず、敵意も見せず。そのまま体感で一分程度。相撲の四つ相撲の様な拮抗が『里香ちゃん』が引くことにより終了する。ゆっくりと解けるように姿を消すと同時に、巡も須佐能乎と万華鏡写輪眼を解除する。
「悪い子じゃないな。気に入られてるね、乙骨憂太君？」
「おかか、明太子。」
「まぁ、てな感じに色々あって、彼のことが大好きな里香ちゃんに呪われてる乙骨憂太君で～す。仲良くしてあげてね。憂太に攻撃すると里香ちゃんが出てきちゃうかもしれないから気をつけてねー。」
「(その色々を説明してくれよ)」
「せっかくだから自己紹介……する気分でもなさそうな感じだな。俺は千葉巡、まぁなんでもできる万能型だ。こんな感じに簡単に紹介しちゃうからな。」
「紅一点、禪院真希。呪具中心に戦う接近戦専門だな。」

「語彙はおにぎりの具材。狗巻棘。俺もまだ半分くらいしかちゃんと分からないけど、まぁ雰囲気で乗り切ってる。言霊で戦う中距離戦が得意だな。」
「Ｔｈｅ、パンダ。パンダだ。喋るけど仲良くしてやってくれ。ナックル見れば分かるだろうけど殴る蹴る専門だな。」
「パンダだ、よろしく。」
「(ホントに簡単にしか説明してくれないじゃん…)」
「巡ありがとう。何にせよこれで一年生も五人になったね。」
「これからの呪術実習もペアでやるよ。棘・パンダペア。真希・憂太ペア。巡は僕と一緒に真希と憂太の実習の見学だよ。」
「なんか俺やらかしました？待ってる間説教？」
「いんや？ほら、ここに来てから単独で二級呪霊２体、一級呪霊１体祓ってるでしょ？僕や巡からして見れば雑魚だしバイト感覚だったんだろうけど、客観的な二級術師の戦果じゃない。せっかく僕が二級にしたのにすぐ一級になっちゃいそうだから今日はお休み。分かった？」
「納得できないけど納得した。」

「――真希、それくらいにしろ。」
「おかか。」
「分～ったよ、うるせぇな。」
　五条先生と話して居るうちに口論になっていた様子。軽く聞こえていたが真希の主張も一理ある。それを本人に直接言うか言わないかの違いだけだ。
　このまま乙骨憂太が変わろうとしなければいつか潰れるのは誰の目から見ても明らかだった。変わるか変わらないかは本人次第。その真価はこれからの実習でよく分かるはずだと、無言で後部座席に乗り込んだ。左から乙骨憂太、俺、真希である。

特級過呪怨霊祈本里香

「ここは？」
「優太も通ったことのある様な普通の小学校だよ。生徒二人失踪してるけど。」
「い〝っ!?」
「今日の任務は呪霊を祓い、生徒の救出。死んでいたら遺体又は遺品の回収だ。巡、帳宜しくぅ。」
「はーいな、『闇より出でて闇より黒くその穢れを禊ぎ払え』。俺と五条先生は外で待ってるからな。死ぬなよ。」
　空に墨を落とすように空を帳が侵食して行く。外部から内部を遮断し隠蔽。さらには呪霊を炙り出して祓うサポートをしてくれる呪術師にとっては必須な結界である。
　二人が夜の帷に包まれた様な学校を探索している間、二人でガードレールに凭れる様にして暇を持て余す。
「巡はさ、祈本里香のことどう見えた？」
「どういう意味ですか？」
「ほら、僕は六眼、君は写輪眼。見え方は絶対違う訳で、ちゃんと視てたでしょ。」
「俺から言わせたらタチの悪い守護霊みたいな立ち位置に見えましたけどね。根本は全くの別みたいですけど。」
「と、いうと？」
「感覚的な物になりますよ。……祈本里香は『憂太を虐めるな』と言ってましたよね。根本は守護霊の様に見えますけど、ちゃんと意思を此方に伝えながら拒んでます。ちゃんとした守護霊なら問答無用で悪いものは拒んでるはずです。」
「じゃぁそれで説明終わってない？」
「いえ、ここからです。守護霊って祖先だったり親戚が殆どです。でも乙骨憂太の場合は恋人。【愛】の形が明らかに違うんですよ。……いや、一方的な愛じゃないからかな。俺からしてみたら祈本里香が呪ったのか乙骨憂太が呪ったのか分からないように見えてるんです

よ。相思相愛だったからかその辺の境目がホントに曖昧にしか見えなくて。」
「なるほどね。僕の眼とはだいぶ見えてるものが違うね。ありがとう、参考になった。」
「いえ。」
「おっと、……巡、写輪眼出していいから目を閉じたままで中見てみな。……これが特級過呪怨霊祈本里香の全容か、凄まじいね。」
「五条先生とか俺なら普通に戦えば勝てますよね？」
「相応の対応をすればね。でも僕や巡レベルだからこそ言えるんだ。普通の一級術師クラスならすぐスクラップだよ。」
「それもそうか。」
　大型呪霊の頭部だったであろうモノを引きちぎり更に体液か血液か分からないそれを撒き散らしながら悦の限りを尽くす姿は、半分憂さ晴らしをしている様にも見えて来る。真正面から同級生が掛かって行った未来を想像して納得する。あれは生半可な者じゃ祓えない。
　子供二人、禪院真希を抱えて自力で生還した乙骨憂太が帳の外に出ると同時に、祈本里香は何事も無かったかのように引っ込んでしまった。
「お帰り、良く頑張ったね。」
　優しく気絶した憂太に語りかける五条先生の姿を横目に、４人全員と自分を後部座席に押し込んだ。
　呪いに当てられていたり侵食というか感染というか。そんな状態の３人と１人綺麗な乙骨憂太。祈本里香に護られているからとは思うが、あまりにも呪いへの耐性が高い。
「呪った呪ってないは置いといて、ちょっと乙骨君の方の血筋が気になります。祈本里香は一般の家系だって分かってましたよね。」
「あー、そうだね。ちょっと改めて調べてみるか。２人しか可能性がないんだから、思ったよりも早く分かるかもね。」
「まぁ現状乙骨君が貧弱過ぎて主従の主が乙骨君だとしても同じような状況になりそうですから、とりあえずは鍛える所からですかね。」
「そそ。あー、そういえば京都校との交流戦があるんだけどうち数足

りないんだよね。だから1年のうち2人行って欲しいなぁ。なんちゃって。」
「俺に話したってことは……。」
「京都楽しんできなよー！後憂太のサポートよろしくね。」
「暴走する未来しか見えないんですけど。先生手出せます？」
「さーてね。憂太だと暴走した時に止められるの僕しか居なくなっちゃうし、僕これでも忙しいから！あ、お土産だけは買いたいから引率はするよ？先に帰るけど。」
「（うぜぇ～～）」
　決定は決定である。丁度病院に着いたことを良いことにたったらたーと4人全員軽々抱えて受け付けに向かって行った五条先生の背中を見つつ、溜息を吐き出した。

――――――――――――診断中――――――――――――

「里香ちゃんが呪ったんじゃなくて、僕が里香ちゃんを呪ったのかもしれません。」
「愛ほど歪んだ呪いも無いよ。」
「呪術高専で、里香ちゃんの呪いを解きます。」
　こうして死者0で乙骨憂太の初任務が終わり、一つの芯が彼の心に形作られた。ここからが本番である。
　裏で悪意が蠢き、乙骨憂太は学生証を探すのを諦め、千葉巡は未だ会っていない2年生と連携が取れるのか不安になった後考えるのを止めた。

陰陽・前編

京都の2日間が終わった。結論から言ってしまえば一人で事足りた。写輪眼を使うまでもなく術式の最大火力を数発ぶっ放しただけ。空を飛ぼうが、血を操ろうが。燃やし尽くし消し飛ばす火力が有れば問題無かった。

2年生の先輩でもある秤さんと星先輩には色々と仲良くしてもらった。秤さんは先輩という呼び方は何となく似合わず、言えばそれでいいと言ってもらった。

「五条さんと同じ熱を感じる」

とも言っていたが、正直その熱についてはよく分かってないのが現状。面白い人だしＬＩＮＥも貰ったから何時でも連絡出来るのはいいね。

それよりも術式や思想で停学に追い込まれるのは納得が行かないものだ。五条先生があそこまでいう上層部の腐った部分を見たかもしれない。

そして僕は今、禪院家本家に呼び出されています。僕何かしましたか。

五条先生は一人で大丈夫だって言って帰っちゃうし、先輩達は先輩達で停学にされたから好き勝手するって言ってるし、帰りの新幹線は自腹だし後で五条家にお土産代含めて請求しておこうと頭の中で決めた。

「おう、初めましてだな坊主。俺がオマエを呼び出した禪院直毘人だ。うちの当主をしとる。」

「千葉巡です。それでお話って何です？」

酒の入っているであろう瓢箪片手に胡座をかいている目の前の男に対して巡自身距離感を図りかねていた。急に呼び出されたのは良いとして、御三家の当主が学生1人のために時間を作るか？と。

「何、昨日一昨日の交流戦を見ただけの事よ。お主、二級だったか？」
「一応、はい。」
「五条の指示か、まぁ良い。のう巡、禪院家に婿に来る気はあるか？来るならば……そうだな、当主でもどうだ。」
「……？えっと、話が見えませんが」
「ただの勧誘よ。その血が欲しいと言えば分かりやすかろう。」
「男のお子さんがいらっしゃらない？」
「無論居るがな、お主と比べると凡よ。……向こうには真希が居たか。どうだ、今なら姉妹の真依も付けてやろう。」
「一夫多妻って大丈夫なんでしたっけ？」
　価値観がズレている直毘人と、違う意味で天然の巡の話は側から見れば滑稽に映るだろう。
「一旦持ち帰っても良いですかね？それにお子さん居るならそっちに継がせた方が争いとか無さそうですよ……？」
　無難に、無難に。それに歴史から見ても跡継ぎ争い程醜くマイナスしか無い争いも無い。一歩引いて提示ぎみに問いかけてみる。戦いは嫌いではないが面倒事を押し付けられるならば話は別。それに今真希さんと面識の無い真依さん？の了承無しにくっつけようとしなかったかこの人。
「良かろう。俺も今直ぐに返事が貰えるとは思っておらん。腹が決まったら連絡して来るといい。」
「分かりました。」
「折角だ、飯でも食って行かんか。」
「有難いですけど早く五条先生に請求書叩きつけたいので今回は遠慮させて下さい。」
「カッカッカッ！ならば良い菓子屋でも紹介しておこう。纏めて送ってやれ。……真依。見送りして差し上げろ。」
「承知しました。」
　無言で廊下を歩くのは気まずい。それも先程話に出てきた真依と云う子。顔立ちや身長。それに直毘人さんの口調では姉妹らしい。ならば京都校の一年か。

「真依さんだっけ？俺は千葉巡、よろしく。真希さんにはお世話になってる。」
「……あんな雑魚にお世話になってる？嘘ね。貴方の方が何十倍も強いもの。」
　かっちーん。この人好きじゃないと思ってしまった。真希さんがサバサバして居るというならば、真依さんは真逆。自分とは合わないと一瞬で分かった。
「さぁね、でも真希さんは強いよ。色んな意味で。」
「……。」
　返ってきたのは沈黙。それは禪院の門を潜り道に出るまで続いた。
「……さっきの話、受けるつもり？」
「正直ピンと来てないけど、直毘人さんは嫌いになれなそうだし考えてみてる。」
　全てはこれに尽きる。２人を纏めて押し付けようと提案してくる程度にはズレているが、確りとした芯を感じられた。
　それ以上の会話は無く、巡自身もお土産を買ったり美味しいものを食べたりと京都を満喫した後に予定より１日遅く東京へと帰路に着いた。

「あんのクソジジイ！巡になんて事言ってやがる！」
「まぁまぁまぁまぁ、直毘人さんは嫌いじゃないし。ね？ほら、お土産も買ってきたから。」
「しゃけ。」
「お、あそこの奴じゃん。良いお店行ったね～巡。」
「直毘人さんに紹介してもらいました。ついでにこれ、お願いしますね。」
「ん？ああ、これ位ならいっかなー。お土産もあるしね♪」
　四捨五入すると７桁に行く６桁の請求書を見てもこんなに軽く受け流せる大人は中々いないだろう。因みに突っぱねられたら巡自身で払える程度に豪遊した。
「あのジジイ巡のこと気に入りやがったな。それにお前も悪くないと

思ってるだろ。」
「直毘人さんと真依さんとしか話してないから禪院家のことあんまり分かってないんだよね。直毘人さんは俺は好きよ？うん、真依さんの方は苦手かな。姉妹、なんだろうけどあそこまで真希さんと性格違うのはびっくりしたな。」
「あぁ、嫌味でも言われたか。」
「まぁね。」
「嫌なことされたんならちゃんと言えよな。」
「嫌なことじゃないんだけど、お相手に真希さんのこと勧められたかな。ついでに真依さんも。」
「はぁ!?」
「やっぱり連絡取り合ってないんだね。」
　以降、呪術師としての双子がどういうものか。禪院の思考。その辺をちゃんと真希さんから教えて貰った。ちょっと引いちゃったのは内緒として置いて、気になったことが1個ある。
「その双子の呪いだっけ？何とかなるかもって言ったら、どうしたい？」
「ちょっと待て、うちの連中でも諦めてるようなことだぞ。」
「確証無いんだけどね。聞いた限りだと言霊とかのちゃんとした繋がりでしょ？真希さんが陽、真依さんが陰みたいな。なら切り離せばいい。そうすれば本来の円に戻る。」
「理論上はそうだろうがよ、どうやって切るんだよ……」
「五条先生の無下限突破した件、真希さんに言われた後調べたんだけどなんか概念的なものにも有効らしいんだよね。」
「……で、結果どうなる？」
「予想だし分からないけど。真希さんの天与呪縛が完成して真依さんの呪力は二乗で増える……はず。」
「真依と私の呪力が足し算になるだけじゃねぇのか？」
「真希さんの足を真依さんが引っ張っているように逆も然り。２人で1人のせいで天与呪縛に呪力が含まれてる。天与呪縛じゃないのに呪力が少な過ぎる。そういうことだと思ってる。だからこそ真依さ

んの呪力が二倍以上になるのは確実じゃないかな。」
「……やってみる価値はあるか。無理でも損は無い。ジジイに連絡しろ。速攻で場所整えるぞ。」

陰陽・後編

僕、千葉巡。昨日新幹線で京都から東京に帰ってきたのに、今日京都に向かってます。
「真希さん、俺昨日この新幹線乗ってたんだけど……。」
「ごちゃごちゃ抜かすな。クソジジイも了承した。なら出来るだけ早く試すのが当たり前だ。」
京都のお土産を京都に向かう新幹線で食べる。なんかの罰ゲームかと思いつつも、彼女にはそれだけ大事な事なのだと考えを少しばかり改める。
先に連絡をしておいたからか、駅に着けば迎えの車が来ていた。高級車なのだろう車に運転手と三人。会話も無くそのまま昨日門を出たばかりの場所に降ろされた。
門の前で深く頭を下げる一人の女。顔を上げれば昨日顔を合わせた真依だった。
「昨日ぶりだね。」
「……当主がお待ちです。」
「ちょっと待てよ真依、お前も一緒に行くんだぜ？お前も無関係じゃねぇ。」
「出て行ったと思ったら我が物顔で帰ってきて……なんで置いてったりしたの！」
「あ〟？ここに居ると反吐が出る。お前も分かってるだろ。もうここは腐り切ってんだよ。」
「話聞いた限り、直毘人さんがちょっと例外だってよく分かったよ。」
「ジジイも例外なく禪院だ。」
「それでもだよ。真希さんと真依さん自体を完全には否定してない人だと思うけどな。」
「まぁ良い、今日成功すれば私も真依もこんな所に縛り付けられるような雑魚じゃ無くなる。だろ？巡。」
「現状からの推測と色々調べた上での予想ですよ？」
「可能性あるんならいいじゃねぇか。……ジジイ！入るぞ！」

襖を乱暴に開いた先に胡座をかいているのは昨日知り合ったばかりの直毘人さん。まだ昼前なのになんで酒臭さ昨日と同じなの？内臓大丈夫？

その下座にもう1人、知らない顔が腰を下ろしていた。刀を左側に置いたまま、表情の読めぬ狐目で此方を見遣る者の名前を聞こうとするも、先に真希さんから答えが降ってきた。

「何で居んだよ、親父。」

「俺が呼んだ。」

直毘人さんがそれに続く。肌を撫でる空気にひりつく嫌な感じが混じっているが故に廊下から部屋に入るのは遠慮しておこうと、足はそのままに直毘人さんに声を掛ける。

「昨日ぶりですね、直毘人さん。」

「ブッハッハ！婿になりに来たか？」

「いや連絡しましたよね？」

「用が終わったら飯と酒でもやって行け。用意させてある。……無論真希と真依にもな。」

「少し広いところありますか。狭いところだと建物壊しそうですから。」

決定事項なんだろうなぁ。と思いながら、場所の移動を申し出た。案内された場所は池や橋まである広大な中庭。これならば、問題無い。

『闇より出でて闇より黒くその穢れを禊ぎ祓え』

丁度、自分含めて五人を包み込む帳を降ろした後に、瞳を切り替える。

「お主、その眼は……！」

「御三家当主なら名前くらいは知っててても可笑しくない……か？」

「眉唾の噂みたいなものであったがな。」

「真希さん、真依さん。その辺にならんで下さい。直毘人さんと真希さんの父さんはそのままで。巻き込まれないようにして下さいね。」

身体に呪力を巡らせた後に眼に力を込めれば骨が顕現する。ゆっくりゆっくりと膨大な呪力を一つの形に押し込めるのを見せつけて

行けば、本命の剣が使える第二段階までの形成が終了する。
「今から、２人の繋がりを斬り捨てます。初めてやりますから成功するか分かりませんけど、身体に傷などは付きませんから。心配なら目を瞑っていてくれても構いません。」
そう言えば、怯えを含んでいた真依さんが目を閉じ、真希さんが笑ってじっと須佐能乎を見ている。その姿を見ればやっぱりそうなんだな、と微笑みそうになる。
さて。写輪眼。万華鏡写輪眼。普通なら見えないモノを視ることの出来る２つの魔眼。
それをもってしても、２人のつながりは曖昧にしか判断出来ない。１度試しに剣を二人の間に振り下ろしてみたが無駄に終わった。
一息、ふた息。もっと深く。もっと広く。呪力に解釈を。目に呪力を。
いつの間にか両目から血涙を流していた。限界稼働を続けている証でもあり、相応の痛みが眼底に響く様に頭に伝わって来る。
「巡！」
真希さんが叫ぶものの、片手で制する。もう少し、もう少し。――見えた
一度眼に焼き付けてしまえば後は簡単なモノ。するりと天叢雲剣の切っ先が因果を断ち切り、不完全な１つの土塊が漸く２つの輝く玉へと変わる瞬間が訪れる。
「何、これ……。」
「ッ……！巡！最高だ！」
須佐能乎を解除して荒く息を吐き出しながら万華鏡写輪眼を写輪眼へと変化させる。右目抑えながら左目で２人の変化を見ると、良い方に転んだと確証が持てる。
真希さんは海。深海。何処まで行っても深く惹き付けられるような漆黒。何処まで行こうと呪力を感じず、その代わり生物としての格が上がった。その様なイメージを直に叩きつけられる。
真依さんは光。弱々しいものでは既に無く、溢れ出る呪力に戸惑っている様子である。今ならば長距離ミサイルを作ったところで余裕

がある様に見える。それ程の躍進。故に溢れ出てきて仕方ない。呪力量は……二級以上。掌握してしまえば一級クラスにもなれるだろう。
「ブッハッハッハッハ！良かろう真希！お前の望み通り当主候補に加えてやる。真依、お前もだ。して、巡。お主がうちはの末裔だったとはな。」
「五条先生は写輪眼も知らないみたいでしたけど、直毘人さんよく知ってましたね。」
「俺も知ったのは偶然よ。闇でも紅く光る瞳に比類ない瞳術。そして特異な属性術式。そのふたつがあるのだ、疑いの欠片も無かろう。」
「何だお前、苗字隠してたのか。」
「うちは一族自体は４００年位前に色々あって滅んでるよ。苗字を変えて細々と血筋を繋いできた、って親父に教わった。実家はそこら辺だと大きいみたいだったし細々かは分からないけどね。」
「ちば、うちは。なるほどな。だから家紋が扇か。」
「多分ね。」
三人の様子を忌々しげに一歩引いた位置から見るのは扇である。兄がいきなり当主の座をよく分からない外来の呪術師。それも学生に開け渡そうとしているのを聞いて怒り心頭でこの場に居た。
だがどうだ。先程見せたのは一部だろう。兄が云うには他にもある様に聞こえる。落ちこぼれの、ゴミにも等しい我が汚点を見事本来の姿へと戻して見せた。
排除しようとしたところであれでは、無理だ。そう思ってしまうほどに見せつけられた須佐能乎は圧倒的だった。あれで二級だと聞く。此方は特別一級だぞ、と微かに震える指先で鞘に手を添え鍔に親指を掛けた。然し、何も出来ず項垂れた。今ではない。いつか。いつか。立場を脅かす此奴も、我が汚点も。排除すると。
いつの間にか真希さんのお父さん居なくなってるのに気がついたのは目から流れる血が止まり、食事の席に通された時のことだった。
まだ未成年だと言っても聞かず。日本酒を注がれた盃を無理やり

渡されてしまった。ちびっと飲んでみるも水の方が美味しいのではないかと云う、中々大人向けの味に顔を顰めて水を口直しにがぶ飲みする。
「それで、今直ぐには決めないという方向性でいいのだな？」
「学生に全財産押し付けようとする老人になんで頷かなきゃいけないんですか。遠いんですよ東京から京都。」
「ブッハッハ。まぁ良い。真希も満更ではさそうだしな。あと十年は居座るつもりだ。それまでに決めておけ。」
「黙れクソジジイ！」
「ブッハッハッハッハ!!」
はっきりと言い当てられて思わず立ち上がる真希の耳は根元から真っ赤である。
巡からしてみれば眼から血を流すのは初めてでは無い。須佐能乎や月読。限界を迎えそれを超える力を生み出す時は大抵溢れ出してくる。それを目の前でやっていなかっただけである。
真希からしてみれば、タオルを目に押し当て看病みたいなモノをしている時から気が気では無かった。今までに感じたことの無い全能感に酔いながらも、向上した五感にて万華鏡写輪眼から写輪眼に切り替えた場面をみて瞬時に悟った。私達の為に無理をしたと。
同級生、されど他人。文句を言いつつも確りと自分をそのままの自分に見てくれて動いてくれた人に惚れない方が少ないだろう。
真依からしてみればほぼほぼ初対面。真希の様に交流も無く、今日だって流れの様に連れていかれ。怖い巨人の前で震えていただけ。扇の様にかなり引いた位置にいた訳では無いが、三人の蚊帳の中には入れなかった。……然し、明確な感謝は確りと心の中に灯った。
「……ありがとうございました。」
そう、２人が車に乗って帰る時に、小さく言うしか無かったが。
「ったく、心配させんな。」
「初めての経験だったから何処まで観ればいいか分からなくてね。ごめん。……それで、直毘人さんが言ってたけど……本当？」

「チッ……ぐ、ぅ……。はぁー、本当だよ。たく。ジジイの思い通りになってる様で納得いかないけどよ、そういう事だ。」
「そういうことじゃ無くてちゃんと口に出してほしいな～？」
「馬鹿目隠しと似た様な雰囲気出すんじゃねぇよ。……好きだよ。……これで良いだろ！」
「はいはい。よく出来ました。」

からからと笑いながらそっぽ向いてしまった彼女の頭撫でれば、ビクっと肩震わせた後に叩き落とされた。
「そんな余裕たらたらなテメェはどうなんだ、巡。私に恥かかせたんだぞ。」
「直毘人さんから言われてずっと真希さんについて考えてたんだよね。短めだけどずっと一緒に居て、2人でも任務に行ったりしたけど……思ったよりお似合いなんじゃ無いかな、俺達。あ、料理とか家事はちゃんと出来るからね。安心して？」
「そんな心配してんじゃねぇんだよ。」
「そっか。」
肩とんとん、ってやった後に拳向けたら流し目でこっち見た後に拳合わせてくれた。
「改めて、よろしくね、真希さん？」
「真希でいいだろが。わざと付けてるだろ。」

帰ったら五条先生が苦い顔して真希のことを見てたり、お土産ないのか茶化してきたり、関係性が変わった事察知してニマニマしたりと八面顔が見れて楽しかったけど、最初に出した顔はなんだったんだろうか。

逢魔が時

もうマフラーを巻く時期になった。此処での生活にも、もう完全に慣れた様に感じられる。

「なんかちょっと嫌な感じが……」

「気のせいだな。」

「おかか。」

「私も嫌な感じがするから憂太側だな。」

「真希がそっちなら俺も憂太を信じてみようかなー。」

「ちょ、みんなーッ！……真希さん巡君はありがとう。」

「憂太の呪力感知ザルだけど、真希の五感なら信じられるか。」

「しゃけ？」

「狗巻君のしゃけって便利だね。」

任務はあれど穏やかな日々が続いている。

真希と巡は日課として毎朝ランニングをしているけれど、天与呪縛が覚醒してからは呪力を身体に纏わせないと真希に追いつけなくなってきている。速すぎ。無理。と言った所、弱音吐くんじゃないと真希に叩かれた。解せぬ。

入学当初は体術と武器術は巡と真希のツートップだったが、今では完全に真希の独占状態。ランニングと同じく呪力ありきならば巡も渡り合えるといった所だ。呪力操作は巡、次いで棘。憂太に対しての指導は最初は巡だったが棘の言葉を分かってきてからは棘も加わるようになっている。

ここ最近で変わったことと言えば、ズバリ階級。巡は禪院直毘人、それに対抗する様に五条先生からの推薦……では無く五条先生からの依頼を受けた冥冥の推薦を受けて一級術師に昇格した。真希、それに真依さんも直毘人さんともう一人に推薦を貰い二級に昇格した。

単独の任務がある時に保険として特級呪具でもある瓢摩を初めて担がせて持って行ってもらった時に、過保護だと三人からニヤニヤされたのはいい思い出でもある。

巡の戦闘スタイルは瓢摩無しで完結している。領域展開を習得はしていないが、多彩で広範囲高火力の術式に、写輪眼の切り札まで持つ。遠間から質量による圧殺が初手故に、特級呪具の手持ち無沙汰感が拭えなくなってしまった為でもある。

そして、真希さんは眼鏡を呪具から伊達眼鏡に変えた。センスの悪い丸眼鏡ではなくて、キリッとした顔に似合うシャープなものだ。無くても可愛いが、眼鏡も掛けていて欲しいと云う巡の要望で一緒にデートと言う名前の任務後に買いに行った。

「来んぞ。巡、呪具よこせ。」

「はいな。そんなにヤバい？」

「巡ならやれそうだが底が分からねェ。」

まだ自分達には見えない空を確りと見つめる彼女に躊躇なく万華鏡写輪眼になれば、左目の能力にて瓢摩を手渡す。

万華鏡になったからこそ、自分も漸く捉えられた。ペリカンらしき巨大な鳥型の呪霊に、袈裟を着た呪術師。バタバタと校舎の中が慌しいことから、呪術師ではなく呪詛師だと当たりをつける。

「変わらないね、ここは。」

胡散臭い前髪に、夏油様と呼ばれる男。次々と呪霊の口から出てくる上裸の男、女、女。

「侵入者は許さんぞ、憂太さんが。」

「しゃけ、しゃけ。」

「とっとと帰んな！憂太さんが怒る前にな！」

「初め、……おっと、君達には用は無いんだけどね。噂より優秀じゃないか。」

一瞬で距離を詰め憂太と握手をしようとしていた夏油と呼ばれた男と憂太の間に体を割り込ませて瓢摩で手を弾き、ゆっくりと構えたのが真希だ。その隙を突き、左側から動脈を狙う様に指を突き付け、万華鏡写輪眼で観ているのが巡である。

「失礼、では少し離れて話でもしようか。」

そう前置きしてから、二三歩後ろにさがりつつ夏油は演説を始める。

曰く、強者が弱者に適応している世界は矛盾である。
曰く、人類の生存戦略を見直すべきだ。
故に、非術師を皆殺しにして術師だけの世界を作る。
そうのたまうわけだ。
「僕の生徒にイカれた思想を吹き込まないで貰おうか、傑。」
「悟！久しいねー。そうか、粒揃い。それも飛び抜けたのがいると思ったら君の受け持ちか。特級被呪者、突然変異呪骸、呪言師の末裔、天与呪縛、そして、うちはの生き残り。」
「傑、どういうつもりでここに来た。」
「宣戦布告さ。来る１２月２４日。日没と同時に我々は百鬼夜行を行う。新宿、京都。合わせて二千の呪いを放ち命ずるは無論鏖殺だ。」
「地獄絵図を描きたくなければ死力を尽くして止めに来い。思う存分、呪いあおうじゃないか。」
「その前に私達に祓われる事は想定してなかったのか？」
「しゃけ。めんたいこ。」
「彼女達が木下通りのクレープを食べたいと言って聞かなくてね。……さて、私の予想よりも強い子が多いから、ちょっと奮発しておいたよ。頑張ってくれたまえ。……それでは皆さん、戦場で。」
彼らが飛び去る頃には周囲１００は下らぬ呪霊の群れ。その内２０は二級以上の呪霊。瞬時に殲滅に取り掛かるものの片付け終わる頃には夏油一派は影も形も見えなくなってしまった。
「総力戦だ！今度こそ夏油という呪いを完全に祓う!!」
「総力戦だ。今度こそ夏油という呪いを完全に祓〜う。なんて息巻いてるんだろうな。あの脳筋学長。」

六道仙人

１２月２４日。僕はまた禪院家で昼ご飯を食べています。それも直毘人さんと頬を腫らした禪院直哉さんとかいう直毘人さんの息子も添えて。なんで頬が腫れているかと言ったら彼が真希を煽って真希にグーパンを貰ったからです。良かったね直哉君、真希のパンチ５割位の手加減だったはずだから顔面崩壊してないよ。直毘人さんは笑ってたからお咎め無しで終わりそう。

なんで僕、僕じゃねぇな。俺が京都に居るかっていったら百鬼夜行を迎え撃つ配置を京都に設定されたから。京都に真希と巡。東京には五条先生。階級自体は五条先生の一強であるが味方の呪術師全体を見れば巡も真希も、ついでに言ってしまえば真依さんも、上位に位置するのは間違いない。故の分散。東京にはパンダと狗巻君の２人。高専には憂太がお留守番。

真希はとっとと実績が欲しい。そんなぽんぽんと肩書きあげなくても、と言ってみた所貰える時に貰っとくとのこと。出発前にも、京都についてからも言われたのは同じ事。２人での遊撃。突出した者を指揮下に入れるよりも、好きに祓いまくって貰った方が良いとの判断らしい。

禪院家に来た理由は真希が手持ちの呪具を増やしたいらしい。今回は長丁場であり広範囲。特級呪具でいつも通り押し潰すよりもスピーディに倒す為に刀か槍かを持つそうだ。故に瓢摩は久しぶりに自分の手元にある。真希がずっと使ってるから忘れてたけど、俺ん家の家宝だったな。と思い出した。

事前に直毘人さんが許可を出して武器庫の鍵を預けてくれたから、食事が終われば普通に足を踏み入れられた。

所狭しと並べられている武具、呪具の数々。こっちの方が手っ取り早いと、写輪眼で視た込められた呪力量から等級を判断してゆく。

最終的に選んだのは鎖の先に付けたものを自動的に手元まで戻してくれる鎖型の一級呪具。瓢摩の端につければ格好が付く。直毘人さんにはくれてやるって言われたけど後で返しに来ます。

真希が選んだのはこの部屋で一番質の良い刀一振りと薙刀一振り。彼女の手持ちよりかなり質の良い一級から二級の合間のもの。直毘人さんが口を開く前に
「ジジイ、貰ってくぞ。」
と言って俺に押し付けてきた。左目だけ万華鏡にすれば鎖共々取り込んでおくが、便利な荷物持ちになって無いかな?・まぁ、悪い気はしない。
日没近くまで禪院家で武器の感覚を調整しておく。以前ならば周りからの腐った目線があり、居るのも嫌になるような場所だったらしいが、直毘人さんがその辺りはどうにかしたらしい。飯前に突っかかってきた直哉さんはその筆頭のような人らしいが、煩い口を拳骨によって塞がれた為今は何も無い。

夕方。一応京都校の面子とも顔合わせの時間が設けられた。
「千葉巡!・改めて聞いておこう、貴様はどんな女がタイプだ!!」
「ポニテ、長身、引き締まってる身体。でもちゃんと胸がある。簡単に言えば真希だな。」
「それでこそマイブラザーだ!」
これでも身長ある方なんだけどなぁ、と目の前の東堂を見て自信を無くす。歳下の先輩という中々無い存在に肩を組まれゆさゆさと左右に揺れている様子を見ているのは女子組である。
「あら真希、愛されてるじゃない。」
「真希ちゃんも好きなんでしょ?・いいじゃん両想いで。」
「(両想いかー。いいなー。あんな相手……東堂先輩も加茂先輩もちょっと怖いんだよなぁ。メカ丸はメカ丸だし……。)」
「あ゠ーー!・うっせェ!」
弄られ慣れていない故の反応は、遠目から見ていても可愛いもの。
呪いを解呪してからは姉妹の距離もそれなりに戻ってきたらしく、連絡をちょくちょく取っている様子だ。ビデオ通話で西宮さんと三輪さんについては顔だけは知っていた。
交流戦には居なかったから巡は知らないけれど、三輪さんの髪色が

地毛な事に今日1番驚いていたりする。
そんな緩い空気も日が傾けば傾く程に自然と引き締まって行く。特大の帳が降ろされれば、完全にそこは戦場となる。
夏油一派も巡と真希が京都に向かったと把握しているだろう。どこまでこちらに戦力を割いてくるか分からない中、呪霊が空を飛んで此方に向かってくる姿を写輪眼が捉える。
「真希。」
「分かってる。」
既に呪具は彼女の手に。作戦も既に伝えてあるが故に一言で返事が帰ってくる。出来るだけ高度が欲しかったが為に、2人とも瓦屋根の上に陣取っている。
『火遁・業火滅却』『風遁・嵐龍弾の術』
今から行うのは自らの手持ちの中で最高範囲であり上位の火力となる組み合わせ技。右手に炎、左手に風。均等の呪力になるように写輪眼で微調整を行った後に胸の前で混ぜ込み、一つの業と成す。
『炎遁・龍華失滅』
思い浮かべるは龍の息吹。手の平を合わせた中で荒れ狂ういまにも爆発しそうなソレに息を一息吹き込めば、瞬く間に目の前は業火に染まる。事前に通達していた為呪術師を巻き込むことも無く、飛行系呪霊とそれに乗っていた呪霊たちが、文字通り全て消し炭と化す。一級呪霊も背の高い巨人の特級呪霊も例外では無い。
これがうちはだと背中の家紋が物語る。たった一瞬、一撃で２００は下らぬ呪霊が祓われた。炎の影響が消え去れば、これからは他の呪術師による総力戦。地を進む呪霊に向かい次は真希が突っ込んでゆく。
天与呪縛が完成してから、少しの間はギャップに四苦八苦していた様だが今ではその姿は無く、銀の軌跡が彼女の後ろに繋がる。そのレベル。二級以下では反応すら出来ず祓われ術式を持つ準一級レベルですらも急所であろう場所を薙刀か刀によって軽く切り裂かれて沈んで行く。
耐久特化の敵が出て来た場合は巡の出番である。現状は真希のサ

ポート。適当に間引き、真希が倒せないであろう呪霊から優先的に潰して行く。
蹂躙、鏖殺。呪霊特有の体液がそこら中に零れ、文字通りにその言葉が似合う景色に変わっていく中、背後から一陣の風が吹く。問題なく2人とも対応出来るレベルだったが。真希が首筋を、巡が後脚を狙って攻撃するも、無傷。確かに当てたはずだと思いながら息を吐き出す。生半可な相手では無いと気を一度引き締める。それは真希も同じ事のようだった。
敵と言える相手。それは全長5メートルを超えるコオロギであった。
未登録特級呪霊『戯哭蘭（ぎこくらん）』
動き回る速度は真希や巡の全力よりも下ながら、脅威はその特異能力。羽根を振動させることにより身体に呪力を回し物理攻撃を脅威の１００％カット、呪術的な攻撃も８０％という高水準でカットする文字通りの無敵戦車である。夏油傑が対禪院真希に送り込んで来た呪霊でもある。
そんな情報はあるはずも無く、2人がかりで攻め立てるも一向に勝負が付かない。互いに無傷のままだ。須佐能乎を形成しようにも動きが鈍った所に突っ込まれ骨が砕かれるのが目に見えている故の千日手。

「真希、少し1人で相手してもらっていいか？」
「早くしろよ！」
右手に刀、左手に薙刀。縦横無尽に飛び回りながら足を止める此方に来ないように呪霊を押し止めてくれている真希を目の前に、息を吐き出す。
閉じた瞳の中で1段階スイッチを切り替える。鎖で意図的に縛り付けて使えなくしていたもう一段階上のモノ。万華鏡写輪眼が行き着く先。故に、同時にあるものが"咲く"のは必然である。
『領域展開・月桂無窮天元』
両手を組み合わせるようにして巳の印を組む。自らと真希、特級呪

霊と周囲に居た呪霊もついでに巻き込み発動するのは呪術の極致。
それは、呪力からの脱却の第一歩でもある。
「これは……!ッ" ……ああ、そういう事か。」
良く夢に出て来る木々が生い茂る世界。天を貫く巨大なナニカの頂上。ずっと実かと思っていたモノが花開いていた。
「理解した。」
身体に纏うは六道の衣
背に浮かぶは求道玉
額に開くは輪廻写輪眼
そして身に巡る力は呪力では無い。周囲の木々が、目の前の神樹が精製し、無限のバックアップとして供給してくれる自然エネルギーである。
天上天下唯我独尊。この世界の初めての住人であり、神である。
全能感に酔いしれる。文字通り高笑いでもしそうな雰囲気ながら敵に目をやれば、もう勝負は決していた。
藻掻く蟋蟀。その身体の半分以上は木々へと変化し既に地面に根付いてしまっている始末だ。
この世界の主軸は自然エネルギーである。故に呪力はただの邪魔者である。そんな自然エネルギーの満ちる空間に呪力の塊が居ればどうなるかは必然。
下手をすれば蛙に、蛇に変化してしまうように。完全に適応出来なければ木となるのみ。
呪力から完全に脱している真希にはその影響は皆無な様で、コオロギが木へと変化するまでそれを観察していた。
崩れる世界。それと同時に第三の目は閉じる。理由は無論理解している。あの神樹とリンクしているからだ。六道の衣も、求道玉もあの世界での最適を得る為の装置に過ぎない。両の目が輪廻眼のまま、静かな京に戻ってきた。
「ふぅ……巡、その額の跡。大丈夫か?」
「ん?…あ…あ、大丈夫。名残、みたいなものだと思ってくれたらいいよ。」

輪廻写輪眼が開いていた場所には縦に一本、跡が刻まれていた。触られても痛みや違和感はないものの、領域展開をすればまた開くだろう。

特殊な領域展開。初めて故に知覚できたのは半分にも満たないが、この世界と全く別の世界を形作っていることは分かる。

そんな事を考えつつ、ゆっくりと二人で呪霊を祓うこと３０分。勝負は東京よりも大幅に早く決着した。

呪術廻戦
まったり春の日差し。恵君を添えて。

優太が祈本里香を呪解して四級に。その数ヶ月後には『リカ』を取得し特級に返り咲いた。

巡はというと一級のままである。真希も真依さんも百鬼夜行の功績から準一級に昇格したというのに何故かと云えば、五条先生と禪院直毘人の思考が偶然にも一致したからともいえる。

領域展開を修得したからといって一級に上がってから日が浅い。また、五条からしてみれば大切な生徒。直毘人からしてみれば将来取り込めるかもしれない金の鳥。故に無理はさせない方向性となるのは必然。それが一つ。

また巡に階級へのこだわりが無いことと、生活に困るわけでも無いことも理由の一つだ。一級の時点で入ってくる金は学生という身分をはるかに超えており、あまりに余っている部分は実家に仕送りしているほどだ。

故に巡が学生でいるうちは緊急事態が起きない限りは一級に押しとどめる、らしい。

学年が一つ上がるということは、後輩が入ってくる時期ということでもある。伏黒恵は血筋的には禪院の子らしく、五条先生が禪院に買い取られる約束を白紙にして引っ張ってきたらしい。真希との付き合いもあり、顔見知り程度には知り合っているのが現状だ。

十種影法術。巡の術式と根本から違うものの、かなりの万能さを誇る禪院家の大元の相伝術式だ。手札が多い者同士話が合うかと思ったが、去年の京都での広範囲殲滅攻撃を知っていたのか、ちょっと引かれた位置から話をされたのでちょっと悲しくなった。

今のところ1年は1人。2年は5人だ（乙骨が海外の為現状４人）。だからか今では午後の実習や体育は5人で行うことが殆どだ。

真希ｖｓ巡の呪力ありでの組手では校庭の地形を変えて学長に怒られたり、棘と巡二人で恵に呪力操作を教えたりとほんわかした暖か

い春が過ぎてゆく。

・原作と色々変わった人達の現状とか諸々

千葉巡

領域展開を練習するうちに効果や内容は把握したものの、あの時巻き込んだのが真希じゃなかったら取り込んでしまってた可能性が高くてガタガタしてたりする。今術式反転と黒閃の練習中。真希の腹筋触らせてもらって腹筋フェチになりそう。

禪院真希

現状全力を出して組手の練習出来る相手が巡と五条先生だけの為、もっぱら任務先の呪霊に対して呪具の扱いを訓練してたりする。多分最強の準一級術師。本気でやると訓練用の杖も生半可な呪具もぶっ壊れるので二級以上の呪具を使っている。

巡とはほぼ毎日一緒にいるのが当たり前の為あまり恋人としての進展は無し。腹筋触らせた代わりに巡の身体を触ってるから、どんな身体してるのかとかはお互い把握していたりする。

禪院真依

2．3日で天与呪縛に慣れた真希と違い、未だに増えた呪力を完全掌握出来ていない。五感の強化とかの違いが大きい様子。練度はまだまだだが二級呪具も作れる様になった様で偶に真希に送っている。その為東京高専に預けてある真希の手持ち呪具が結構増えてたりする。

乙骨憂太

京都に行った真希と巡を心配していたけど結果を聞いて苦笑いした。祈本里香の呪解時2人だけいなかったから帰ってきてびっくりされた。ミゲルと海外なう。

伏黒恵

ただの踏み込みで地面に跡を付けて超高速で組手をずっとしている真希巡ペアにドン引き中。ついでに五条先生の体術のレベルも同じくらいって分かったから半分諦め顔になった。入学時から二級スタート＋同じ万能型術式なのでちょっと巡に期待されてる。

夏油傑

京都に放った特級呪霊の片割れ祓われてないのに京都の呪霊殲滅されてて半分頭混乱してたりした。ちなみにちゃんと五条先生がトドメを刺して解剖には回してません↑

幕間

「真希、おはよう。」
「おはようさん。ほら、ぼんやりしてないで行くぞ！」
どうにか二人一緒に２日間の休みをもぎ取ることが出来た。準一級に一級。本来ならばあるはずも無いのだが、前々から五条先生や学長に相談していたお陰でこうして私服でのお泊まりデートを楽しめる。
真希は薄手のロングコートにくるぶし上の短めなGパン、茶色いショートブーツを身に着け、髪は巡の希望でいつも通りのポニーテールにし、首元には巡が誕生日に送ったお揃いのネックレスを付けている。
対する巡は黒のカッターシャツにブルーのジーンズを着ている。その上から明るい茶色のコートを羽織り、第１ボタン開けた所にサングラスを引っ掛けている。左腕に付けているシンプルなシルバーの腕時計は五条先生に勧められたものだ。
巡の首元にはいつも通りのネックレスがあるが、２人とも普段の黒い制服とは違い大人びた雰囲気醸し出している。もっとも今年で１９歳の巡に関してはほぼ大人なのだが。

五条先生に腕時計以外にも色々といい所を教えて貰ったが、桁が予想の１桁上で腕時計以外は断った。シャツ１枚で６桁はまずいです先生。そして腕時計１つで７桁もする奴を高校生に勧めないでください。余裕で買えるから買いましたけど！金銭感覚狂ってんなこの人（褒めてない）。でもお菓子をお土産として持って帰ってくることを約束したら、色々とお店紹介して貰えたのでそれは感謝している。
デートといえば現地待ち合わせからの待った？が定番だとわかっては居るが、ちゃんと思い出してみよう。呪術高専が東京の癖に山の中の更に山の中にある事を。大人しく一緒の車で向かいましたとも。
車に揺られる中色々と携帯を弄りながらどこに行こうかと見せていたが、昼飯はハンバーガーがいいと候補の中から即答されたので六

本木の『ＡＬＤＥＢＡＲＡＮ』に向かう事にした。
高校生の身分を超えた金を２人とも抱えている。真希も巡には及ばずとも四級時代と比べれば何十倍も稼いでいた。ただ、呪具を購入したりと巡よりも出費が多い事を知っている為、今日のお金は全て巡持ちである。
車から降りる前に思い出した様に万華鏡写輪眼の倉庫から２人分の荷物を吐き出す。高専内だとほぼ全て手ぶらで動いている２人にとっては荷物を態々鞄に入れて持つのも久々である。
六本木ヒルズ辺りを軽く散歩しつつ、普段はしない恋人繋ぎをしてみる。歩幅を合わせて歩くことはあれどパンダと棘、憂太の前でこんな事をしては五条先生も追加で揶揄われるのはもう分かりきっていること。巡自身長身であるが真希も女性としては長身で、ブーツの底もそれなりに高い為難なく繋ぐことは出来た。
細く長い指に無骨な節の太い指を絡めあわせる。掌の皮の厚さは呪具をずっと扱っている真希の方が分厚いと云うギャップも、真希のこれまでの努力が見えて愛おしくなる。にぎにぎと真希が手の感覚を確かめる様に握ってからにかっと笑う。男勝りでもあり、カッコいい似合っている笑い方だ。やっぱり俺も惚れてるんだなぁ、と頬がちょっと赤くなったのを自覚する。
巡はうちはの血を引いており、真希も禪院の血を持つ。それは顔にも良く現れていると言っていい。後ろでシンプルに綺麗な黒髪を纏めている巡と、ポニーテールで首筋を爽やかにして、伊達メガネで更にキリっとさせている真希。下手なモデルよりも体付きも歩き方も綺麗だからこそ、休日の人通りの多い六本木では注目の的となる。
周りの目線が鬱陶しくなってしまった巡はサングラスを掛け、真希の負担にならぬ程度に早足で目的の店に入ってしまった。まだ１１時をちょっと過ぎたくらいだが、いつも通りに早起きをしている２人にとっては早めの時間でも丁度良い腹心地だ。
目立たない落ち着いた端の席に案内してもらい、注文を行う。
巡はリアルバランバーガー、フライドポテトＬ、チキンナゲットＬ、オニオンリングＬ。ドリンクは辛口ジンジャーエール。

真希はリアルバランバーガー、フライドポテトL、コーラ。他のモノは巡のを少しずつ貰うと先に宣言。
「んなに食えんのかよ。」
「真希とは先ず身体の大きさ違うんだから。……もう一個ハンバーガー食べたかったけど、食べたら折角のデートなのに腹パンでダウンしそうだから辞めといた。」
「私達が肥満になる事なんて無いから心配するな。それよりも過労の心配か？あのクソ目隠し、担任の癖にちゃんと高専に居るの2日に半日位だぞ。私やお前だって2日に1回は半日任務だしな。」
「まぁまぁ、とは言えないよなこのブラック業界。学生に普通に特級ギリギリの任務押し付けてきてる時点でやばいよな。」
「語彙無くなってんぞ。デート中くらい彼女のオシャレでも褒める気概はねぇのか？」
「車に乗る前から普段と違う香りだと思ってたけど、俺も好きな香りだよソレ。化粧した真希も綺麗だし、俺が前あげたネックレスしてくれて嬉しかった。私服なんて全然見た事なかったから新鮮ってのもあるけど、後でどっかで写真撮ってもらおう？待ち受けにする。」
「一気に言うな一気に。……恥ずくなる。」
真希がむすりとふくれっ面をするも照れ隠しとしか見えず、赤らんでいる頬がその推測が事実だと教えてくれた。ちょうど注文したハンバーガー＋αが来たのでソレにかぶりつく事でこの話題から逃げる姿も可愛いかった。
ちまちまと食べる事３０分。ぽつりぽつりと話しながらだった為ゆっくりとした食事になったが完食した。食後のアイスコーヒー完飲まで店内でゆっくり過ごし、時計を見れば１２時半を刺していた。
無言でゆったりと店内に流れる音楽に耳を傾ける時間もあったが、互いに悪くないと思っていた。
会計をして店外に出れば、真希が上着の肘辺りを摘んで居た。？と立ち止まれば、そのまま広がり空いた腕の隙間に腕を絡めて来た。はよ行け。そんな瞳の意思に微笑んでからぶらぶらと飯を食べる前に行っていた散歩を再開する。

アパレルや食い物屋が立ち並ぶ通りを歩き、都会の人混みに少し酔いそうになりながらもめいいっぱい時間使って色々と買い漁った後、最後に立ち寄ったのはブライダルリングの専門店だった。
ペアリングが欲しいのは巡の希望だ。プロポーズ用の指輪が給料3ヶ月分とはいうが、ゴテゴテと宝石盛合わせの様なものは好きでは無い。いつでも付けていられる実用性を有するリングの中から気に入ったものを探し、2時間程店員と3．4人で話し合い決定した。
明日の昼には良いサイズが取り寄せられるとの事で、金を先に払って外に出ればもう空は暗くなり始めていた。
夜飯は六本木ヒルズにある『鮨　なかむら』へ。内容はおまかせの為割愛するが、こんな所でビールを流し込めれば美味しいんだろうなと思ったとだけは言っておきたい。ちなみに乾杯は梅ジュースでした。
ホテルもそのまま六本木にある『グランド　ハイアット　東京』に連絡し、空き部屋の中から一番高い所の予約を入れる。金は腕時計へ支払う金額から分かるだろうが有り余ってるのが現状だ。それ程高難易度の任務を多数受けているという事でもあるのだが……
徒歩の範囲でデート完結できるのやばいな六本木。
受付で受け取ったプラスチック型の鍵を押し当てて扉を開け、中に入って一息ついた。両手が埋まるほどの荷物に、精神的にそれなりに疲れていた。速攻で最低限の必要なもの以外をしまい込めば、備え付けの椅子に深々と腰を下ろした。
思い出した様に真希から預けられたモノを取り出してそちらを見れば、熱心に部屋の中の写真を撮っていたりする。聞いてみれば真依や京都のメンツに自慢するとのこと。
風呂に入る前なので2人ともオシャレをした儘だ。記念撮影のような第三者に撮って貰うものでは無いが、真希が器用に巡を引き寄せれば頬を完全に引っ付ける程度まで顔をくっつけて、パシャりと。
「後で俺にも送ってくれ。……風呂、先に入るか？」
「一緒に入る、何てどうだ？」
携帯をベッドに放り投げる真希。写真を撮るために巡が屈んでい

た体勢を利用して、そのまま唇を合わせて見せた。首元に片腕掛けて逃げられない様にする徹底ぶり。
啄む様に二度、三度。巡がいきなりのコトに固まっている間に下唇も上唇も一方的に愉しみ、にんまりと微笑う。
「ご馳走さん。今日まで我慢させたんだ、覚悟しとけよ？」
「待って、もうちょっとゆっくりとか雰囲気とか。」
「ほら、早く風呂行くぞ。」
巡は手を引かれてまだ湯も張ってない風呂場に連れていかれた。周りを気にする事なく接することが出来るからか、電気が消えても荒い息遣いは空が白む時間まで耐えることはなかった。

目覚まし時計など設定していなかったから、起きたのは昼前だった。何年振りかの身体の節々の痛みを感じながら上体を起こし、ぐっちゃりとしたベッドと衣服纏わぬ身体を認識した。当然の様に裸でいる真希の居る隣を見るのが怖くて、シャワーを浴びる名目で逃げ出したのは内緒である。

1年生と顔合わせ出来たけど1人死んでるってマ？

伏黒恵、釘崎野薔薇。2人の後輩の入学が決定している。ただ6月に実際高専に居るのは恵一人だけだ。

『宿儺の指』の回収役に伏黒恵が指名された。

仙台まで行くとの事で朝一から見送りを真希としてから、普段通りの生活に戻っていく。

問題はここからだった。後を追う様に仙台に向かった五条先生から真夜中に愉しそうな声で電凸を食らった。内容を聞いて、寝ていた頭が一瞬で冴えてしまった。

宿儺の器。その確保。上層部へのおど……交渉を経て乙骨憂太と同じく高専預かりとするらしい。

電話が掛かってきた段階で隣で寝ていた真希も起きていた為、次の日には速攻で二年全員にこのことが知れ渡った。乙骨の件もある為かそこまでの騒ぎにはならなかったが、あの指を直接飲み込んだというか取り込んだというか……食べたその虎杖君の度胸と胃の強さにはびっくりしている。

学長にもすれ違った時に聞いてみたが、しっかりと面接はした様子だった。納得のいく答えが出てきた事に満足しながら、会える時を楽しみにして居た。

なんだかんだと忙しく、久々に恵と会えば、隣には初めてみる顔があった。情報通りなら彼女が釘崎野薔薇だろう。なんとも通夜の様な雰囲気漂わせている理由も分かっては居る。

「なんだ、辛気臭い顔してその虎杖ってやつが喜ぶと思ってんのか？恵。そいつには会ったことねぇけどさ。」

真希にも伝えてはあるが暗い空気に耐えきれず、ずかずかと階段に腰を下ろす二人の目の前に現れて、そんなことをずかずかと言う。真希の根本が去年から変わってない証でもあり、悪いところでもある。

「禪院先輩。」

「だから苗字で呼ぶんじゃねぇよ。」
「真希、その辺にしておけ。恵、釘崎野薔薇、災難だったな。」
「ツナマヨ。」
「……何あの人達（人じゃないの混じってるけど）」
「二年の先輩。呪具使いの禪院先輩、呪言師の狗巻先輩、パンダのパンダ先輩。それと魔眼使い、千葉先輩。あと一人の乙骨先輩っていう尊敬できる人はいるけど今は海外だ。」
「パンダのパンダ先輩って説明になって無くない？」
「いやー、すまんな喪中なのに。」
「（バッチリ喋るじゃん）」
「京都高との交流会に出て欲しくてな。去年は俺が人数の問題で京都に行った。３年生が色々あって停学食らってる影響もあってその枠をお前たちに頼みたい。」
　パンダの言葉を巡が引き継ぐ。キッチリと身体のラインにピッタリと合う制服の真希と、口元が完全に覆われている棘。ダボッと袖が広がっており背には家紋がデカデカと入れられている巡。制服？ナニソレオイシイノ？のパンダ。四者四様の服装の中で巡が一番制服の範疇からズレているものがない。
「１日目団体戦、２日目個人戦。殺す以外なら何をしても良い呪術合戦だ。私は知ったこっちゃ無いけどな。」
「真希は呪力が全く無い代わりに素の身体能力お化けだ。呪力無しの殴り合いならこの世で一番強いんじゃないか？」
「ま、怪我しないように本番まで二年と一緒に体育だな。芯がしっかり固まれば力は自ずと付いてくる。やるだろ？死なないようにシゴいてやる。」
「「やる。」」

「いらっしゃいませー。一名様ですか？」
「はい、一人です。」
　呪霊。それも意思疎通を言語か、それに準ずるモノで取れる特級相

応の呪霊が複数体。そんな中に一人だけヒトが居た。呪霊には夏油傑と呼ばれる人が。
　長髪。前髪。胡散臭い袈裟姿。去年東京高専へ押し入り乙骨憂太の持つ祈本里香を取り込まんとした特級呪術師その人である。然し五条悟がしっかりと殺したはず……。違いと言えるとしたら額の縫い目と、家族と大切にしていた呪詛師達の姿が見えない事だけ。
「今の宿儺の実力は大体察せた。千葉巡も去年の百鬼夜行で面白いデータが取れたよ。花御、方向性としては君と近いだろうね。」
「『呪術師で、ですか。それは興味深いですね。』」
「御託はいい。我々はどうすれば呪術師に勝てる？それを貴様に聞いているのだ。」
「２つ、欲を言えば３つ条件を満たせば勝てる可能性の方が高くなる。五条悟を戦闘不能にし、両面宿儺を仲間に加える。これで丁度５割。３つ目は千葉巡の眼を潰す事だ。無論殺しても大丈夫だけど全員で掛からないと難しいかもね。五条悟よりは簡単だろうけど。」
「千葉巡といったか。何故眼なのだ。」
「写輪眼。万華鏡写輪眼。呪術界隈にはあまりに関わる事の無かった最強の魔眼使い一族『うちは』の末裔。それが今呪術界に足を踏み入れた。これは偶然か、必然か。結構特殊な一族でね。彼の場合は領域展開にも眼が関わっているだろうし、彼の力の半分以上はその眼だ。奪ったりは無理で彼にしか扱えないけど、眼という媒体を力にしている時点で潰せば使用は出来なくなるだろうね。」
「なるほどな。貴様の知っている限りでは儂の強さはどれ程だ」
「甘く見て宿儺の指８．９本かな。」
「そんなものか。十分！」
　五条悟に獄門疆を使う事、漏瑚はそれを不要だと断言し手元に置きたいが為に五条悟を襲撃することを選んだ。花御は千葉巡の元へ向かう。仲間に引き入れる、その可能性を探るために。また夏油が言った言葉、呪霊よりも精霊に近い自分と同じ方向性とはなんなのか、そんな疑問もその彼を見れば分かるのだろうと。
　因みに店長も客も漏瑚によってちゃんと炭になりました。なんま

いだぶ。

前触れ

一年にあそこまで啖呵を切ったのだ。二年が成長しなければメンツが保てない。

反転術式。一足先に憂太が習得し、家入さんと同じくアウトプット出来るようにすらなっていたのは中々驚きだった。

フライパン返しのようにひゅーん、ひょい。ウィンガーディアム・レヴィオーサかよ。

現状一切役に立っていない家入さんのアドバイスにそんな文句をぶつくさ言いながら、コインを裏返す様なイメージを持たせて何度も身体に呪力を流す。

なんでも大抵の事はこなせていたからか、出来ない自分に対して苛立つ。

「道具の持ち運びかぁ。」

パンダの気の抜けた声が聞こえる。

「禪院先輩は……」

「私は巡が居るからな。」

真希の視線を感じたから、一旦練習を辞めて皆の方へと体を向ける。多少の汗と喉の乾きを感じたので、実演にはちょうど良いと眼を万華鏡に切り替える。

ぎゅるり。空間がねじ曲がりタオルとペットボトルに入ったお茶が巡の手元に落ちてくる。ついでに2本、三本と地面に突き立てるようにして呪具を倉庫から放出して行く。

「俺は例外。術式拡張でもなんでも無くこの目の固有能力になるからな。真希の呪具も一通りは入っている。単独任務の時は一つで大体は済むようにメイン武器として特級呪具を持たせているが、基本的には2本は手持ちだろうな。」

瓢摩に、遊雲。どちらも1本で大抵の呪霊なら事足りる規格外のモノ。それらが眼の能力による異空間に収納されている。真希は気分によって使い分けていたりする。

真希は片手で大刀や薙刀を全力で振り回したところでなんの支障

も無い程度のフィジカルを持っている。だからこそ、こなせる事である。両手を開ける前提ならばこの回答だけでは足りない。
「影の中に倉庫は作れるか？ノーリスクでは無理だろうが拡張術式の範囲内だと思うけどな。」
「ちょっと、やってみます。」
恵が影を掌の下に作りそれを維持。そのまま手を入れるような動作をすれば地面に指先が沈んでいた。
「何とかなるかもしれません。」

「じゃ、行ってくるね。ぱっぱと片してくるからゆっくり待っててよ。」
「うっス。気をつけてくれッすよ？今日は一級案件なんですから。」
補助監督は新田明。説明された今回の祓う対象は田舎の地縛霊だ。一種の土地神になって呪いを振り撒いてしまった肥大化した呪い。
軽く手を上げて返事をすれば、もう道ですらない山奥にわけ行って入って行く。既に帳は下ろされているので、瞳を闇夜でも良く輝く紅へ変える。
目指すは壊れかけた社だ。呪力を視る眼は濃ゆい瘴気の様な呪いの塊を確りと捉えている。そして何故か少し離れた場所にある懐かしい気配も。例えるならば田舎の裏山で対面していたモノ達。
呪術師として活動し始めてからあの山がどれだけ異質な場所だったかがよく分かった。澱んだ雰囲気など無く、姿形も自然の動物をしっかりそのまま形創ったモノ達だった。故に対面していてもストレス等は感じず、言ってしまえば稽古をつけてもらったような清々しい気持ちになっていたもの。断じて呪を吐き続ける化生などでは無かった。
膨れた顔にボロボロの袈裟、腐りかけの坊主頭。即身仏になり切れなかった僧侶の成れの果て。口からはお経と共にこの世への怨みや言葉に為らぬナニカがとうとうと吐き出されて行く。

その呪霊の頭が突如として握り潰される。原因は分かっている。片腕を布で覆い、人間ならば目がある場所に木の枝を生やした人型の呪霊。明らかに一級の呪霊とは格が違う上に、説明された呪霊は今さっき祓われてしまった。
「ずっと視えてたけど、何者？」
「『それが写輪眼ですか。私は花御。千葉巡、貴方に会いに来ました。』」
脳ミソに直接響く意志のような何か。ただ確りと意味は分かる。彼？彼女？の口からは意味不明な音が漏れ出ているだけなのに。
明らかな特級案件。それも予定に無い乱入という中々無い形。眼を万華鏡写輪眼に切り替え、間髪入れずに身体を骨で包み込む。
「『戦いに来たのではありません、人の子よ。勧誘に、話し合いに来たのです。』」
そんな戯れ言を言っている合間に須佐能乎は完成する。帳が降りている上に人が住むことの無い田舎の山奥。明さんに早く戻ると言った手前とっとと祓って帰りたい。
「懐かしい感じだけど見た事ないし、俺の行動知ってて来たんだろ？なら敵だ。きっちり祓って終わらせてやるさ。」
振り払うは天叢雲剣。木々を切り払う軌道で振られたにも関わらず、すり抜けるようにして花御に迫る。少し遅れて巡自身が右手を手刀の様に振るう。呼び起こされるのは暴風を一つに纏めあげた風遁の一太刀。
『風遁・草薙剣』
微妙にズレた軌跡を辿る不可視の斬撃は天叢雲剣と違い全てを切断しながら花御へと繰り出された。剣を躱した花御の両脚を片方は膝下、片方は膝上から抵抗も無く切り落とし、ついでの如くボロい社すら切り飛ばしてしまう。
「『ア゛あ゛！……私と貴方は似ていると！夏油はそう言ったのです！だから会いに来た！』」
『火遁・迦具土神剣』
天羽々斬剣に圧縮した火遁を纏わせる。木には火。機動力を奪い、

燃やし尽くす。その作戦も呪霊の一言でギリギリ首筋を切り飛ばさんと炎が迫った段階でピタリと止められる。
「なんで去年死んだ夏油傑の名前が出てくる。ソイツは五条先生が殺しているはずだ。嘘か？嘘だな。もっとマシな嘘を吐くんだな。」
『……嘘など！袈裟で、長髪。額に縫い目がある呪霊操術の男です！縛って頂いても構いません！』
「一点だけ違うな。……だが、待てよ。呪霊を操れるんだから死体くらい操れても……だけど授業で呪術師は解剖に回されて……？」
事前情報が自分1人では完結しない。須佐能乎と術式を維持したまま思考を回す。呪霊の皮膚が黒く焦げてきているがそんなこと知った事では無い。首から上だけ持って帰るか？と物騒な案が浮かんでは絵面がヤバいので却下した。
――――ズガッッ"!!!!
右脇腹。須佐能乎のその位置が蹴り砕かれる。呪力を感じない、こんな感じは真希しか知らない。飛び蹴りの要領で何者かが奇襲を仕掛けてきた。おかっぱ頭に全身緑の繋ぎ？の様な服装。男か女か分からない仮面を被った抽象的な人物。
須佐能乎ごと浮かされて退かされたのは初めての事。警戒心を釣り上げて花御といった呪霊の元に歩いて行った呪霊を見る。
「花御っちボロボロじゃん。うっけるーw」
『円居、助かりました。』
まとい、ね。呼び方だけは把握した。手加減は無い。情報は不足気味ではあるが十分。呪霊は祓い呪詛師は殺す。左目から久しぶりに瓢摩を取り出せば須佐能乎の破壊された部分を再構築して前へ――！
「花御っちは撤退してなねー。うちは足止め！行っくぞ～……ッ!!」
円居の身体から緑のオーラが噴き出す。呪力でも無く、自然エネルギーでも無い。先程の奇襲の倍はあるスピード。それ程の加速を以て真正面から須佐能乎を拳で打ち砕く。よく見れば肌は紅潮し、血の巡りが常人のモノでは無くなっている。
『八門遁甲』

円居　海が呪力と引き換えに得たモノはこの技。体内に特殊なリミッターを8つ設け、それを開く事による八段階の身体能力の限界突破。現在円居が開いているのは五門までである。

写輪眼の驚異的な動体視力の強化と先読みで無ければ一瞬にして蹴り飛ばされ敗北しているだろう。全力で呪力を纏う。真希にすら劣らぬ体術に特級呪具。須佐能乎を操作する余裕も無く先ずそのレンジではない。万華鏡写輪眼のまま冷静に一手一手処理しつつ幻術をかけるタイミングを伺って――

『月読』

右眼に呪力集めて彼女の瞳を捉え――られず、不発。一瞬、ほんのコンマすらかかっていないラグがこの勝敗を分ける。真後ろに回り込まれ、そのまま胴体を捕まれた。バックドロップを決めようとしてくる。

タダでは殺られない。瞬時に首から頭にかけて須佐能乎の骨を纏わせて地面とのクッションに。僅かに驚いた顔をする彼女の顔面には、瓢摩を叩きつけようと不格好な格好で腕だけの力で振るう。

一瞬にして距離を取る円居。今しかない。目を閉じたまま瞬時に輪廻眼に瞳を切り替えて――

『領域展かッ……逃げたか。……チッ！」

領域の範囲外に移動されそのまま行方を眩まされた。彼女には今までに無い敗北を味合わされた。苛立ち収まらぬがそれよりも情報が大事だ。走って車へと戻れば、何時もと違う雰囲気と泥で汚れた服に驚かれるも軽く躱し、高専へ飛ばしてもらった。

巡が手に入れた情報が高専各位に伝えられた数日後、五条先生が襲撃されたと情報が入る。ここまでされたらもう確定したことがある。内通者。それもかなりの権力者側。

もうすぐ交流会もあるのだ、未登録の特級がそんなにぽんぽんと出てこられても困る。そして、五条先生も確認した花御の存在。そして夏油傑の身体を使うナニカ。徒党を組んで居るとしたら厄介極まりない。故にこうなるのは当たり前の事か。

千葉巡、交流会への参加見送り。教師と共に待機せよ。
と。

勝手にQ＆Aシリーズ

Q．なんで巡が術式を使う場面が少ないのですか。

A．　高火力を出そうとすると周囲への被害も比例して増加するので使ってません。雷遁などの細かい技も使えますが素手で殴ったりした方が早いのであまり使ってません。京都校との交流戦時は秤先輩に色々言われてやりました。結果森が焼畑農業にもってこいの場所になりました。

Q．月読は呪霊に効きますか。

A．意思疎通が成り立つ呪霊の場合は効きます。ただ、あくまで幻術なので幻痛等はそこまで効きません。それ以外は不発に終わります。明確な意志の有り無しが一つの判別対象になります。

Q．巡の弱点はありますか。

A．防御面がやや脆いです。須佐能乎の骨や身体が巡にとっての最強防御力になります。現状反転術式を習得していない為いい攻撃を1発食らうと中々危ないです。どうにか写輪眼の動体視力と呪力の身体強化で誤魔化していますがそのうち限界が来ます。

Q．巡の好きな食べ物は何ですか

A．寿司がトップでパスタやピラフ等が聞けば上がります。豚バラ肉等の脂っこいものは好きだけど少量でいいと思っていたりします。嫌いなものは特にはありません。臭かったりするのはダメかも。

Q．巡の趣味は何ですか

A．料理、食事、修行、任務。お金貰いながら色々な所に行けて呪霊が祓える現状には満足してたりします。行く途中に美味しいお店を調べて速攻で任務を済ませてお店に行くので任務が逆についでになっている可能性もありますが。ちなみに真希よりも料理してます。

Q．うちは一族の家伝書には何が書いてありますか。

A．独自の身体操作や術式の詳細や須佐能乎の事などの戦闘関係とうちはの歴史が9：1くらいで書かれてます。歴史の部分は千葉家ができてから付け加えられたものの為そこまで詳細には書かれていません。大筒木とか分かってません。

Q．真希と甚爾を戦わせたらどんな展開になりそうですか。
全体的にフィジカルでは甚爾に分がありますのでどれだけ呪具や搦手で差を埋められるかになります。手持ちが同等の場合は長時間の拮抗から真希がミスをして順当に甚爾の勝利になると思います。
Q．巡は口寄せは出来ますか
A．できません。契約先の動物も居ないです。
Q．　妙木山　湿骨林　龍地洞はありますか。
ありません。巡の領域内にそれらしき場所はあるかもしれませんがまだありません。

H―13への質問も受け付けてまー。
Q．オリジナルキャラの名前はどうやって考えていますか。
A．ＮＡＲＵＴＯの世界の名前をベースに漢字に落とし込んで居ます。基本的に能力＋名前はセットです。例　マイト・ガイ→円居海
Q．なんで巡君を2年生にしたのですか。
A．正直何となく。真希とのタッグみたいなのや、禪院家との付き合いも書いているうちに決めました。後付け理由があるならば原作の進むスピードがかなり早い為1年分多く書く事で原作との見比べがし易いかなって感じ。
Q．なんで型月要素あるの？
A．花御の立ち位置が精霊に近いと聞いてあんなやつ沢山居るとこあっても良くない？ってなりました。今作だと霊験あらたかなとここには呪霊じゃなくて精霊擬きのＹＡＭＡ育ちが居るみたいな設定で最初考えてました。

交流戦①

「故人の虎杖悠仁君でーす！」
「はい、おっぱっぴー！」
方や白けた空気、方や五条先生から配られた異国のお土産に夢中な空気の中黒い箱から出てきたのは、死んだと聞かされていた虎杖悠仁だった。一年の二人が完全に固まっていることから、上で情報が止められていたのかと納得……出来るか！
夜蛾学長と楽巌寺学長に目をやると、2人とも同じ様に目を見開いている為、五条先生の独断だと判断した。ため息のひとつくらい零してもバチは当たらないだろうか。
五条先生の独断は今に始まったことでは無いからしーらね、と自分はそそくさとみんなの輪の中へ行く。
「いつまでそこにいる気だ、とっとと降りろコラ。」
真希が箱ごと虎杖悠仁を蹴り落とす。これから各校で作戦会議だというのに、中々の爆弾を落とされてイライラしているのは明白だ。
皆と一緒に居たいのは山々だが、ここからは別行動になる。虎杖以外の全員に動きのアドバイスを少ししながら、虎杖悠仁の肩をぽんぽんと叩く。お前にはアドバイス出来ん。すまんな。ってその写真の外枠みたいなやつ持つなやめとけ！
真希に保険の遊雲を渡してから五条先生や学長達と待機部屋に向かう。余っていたのか異国のお土産を五条先生にあげるって言われ渡されたが、要らないため貰った上で歌姫先生にあげてしまった。
学長二人、五条先生に歌姫先生。中継役の冥冥さんに、自分。ちゃんと席まで用意して貰ったので、勝手に1番後ろの全員の頭が見える位置に陣取る。
「千葉君、久しぶりね。今回出れなかったのは残念だったけど……。」
「お久しぶりです。文句無いわけじゃ無いですけど、まぁ理解は出来ます。去年秤さんに色々言われたからとはいえやりすぎましたし。」
去年挨拶だけはした彼女と改めて挨拶を交わす。こうしてみると常識人だ。五条先生との相性が中々悪いんだなと実感する。

作戦会議が終わった後の東京校と京都校の面子を見る。
異質なのは紛れもなく真依。溢れんばかりの呪力を未だ制御出来ていないが、それでも以前に比べれば十分過ぎる躍進だ。
これまでならば拳銃を携えていた手には対物ライフルとバズーカが精製される。中に込められているのがゴム弾とはいえ、木数本程度なら貫通できる破壊力を持つそれらを肩に軽々と担いでいる。

五条先生の無茶振り、歌姫先生の五条先生へのキレ声、気の抜けたゲームスタートの掛け声。らしいと言ってしまえばそれまでで、背もたれにもたれながら　健闘を願うのみ。
２チームが一斉に動き出す。既に東堂は画面外へ。文字通り一直線に東京チームの方へ木を薙ぎ倒しながら向かっているのだろう。
広域なフィールドなのに、画面が少し少ない。然しある程度の人数はリアルタイムで画面内に移動しているのが分かる。
虎杖が東堂、三輪は真希。パンダと釘崎は西宮と順当に分断されて行く。それを行っているのは東京校であり作戦通りという意味では京都校よりも一歩リードしているだろう。
「（真依のば……ッ!!）ぁ！」
「へぇ、悪くない刀使ってんじゃん？」
「え〝……刀……返して……？」
「リタイアすれば返してやるよ。」
簡易領域を発動する事も、満足に戦う事も出来ずに合気の要領で軽々と刀を奪われ放り投げられた。
腰の鞘だけで真希に太刀打ち出来る力量は三輪には無く、弱々しく手を伸ばして頼むしかない。当然それに対する返答は無慈悲なものだ。
呪具も何も使わずに三輪を一蹴した真希の戦いは、しっかりと観戦している教師陣の目にも止まっていた。
「良い腕じゃないか。」
「でしょー？巡の彼女だし。どう？彼女が褒められるって。」

「こんな大人数の所で言うなよ。……まぁ、悪くないんじゃない？」
「素直じゃないねー。お、やっと一体か。みんな勝負に興味無さすぎじゃない？」
片手でも祓える低級の呪いが祓われ、赤く札が燃え上がる。
冥冥さんが楽巌寺学長に金を積まれて居ることは、金の味方という言葉で大体は把握出来た。京都校も1体呪いを払ったものの、依然として大元の勝負には関わらず生徒同士で争っている姿が確認出来る。
札が全て燃え上がるまで、まったりとした観戦時間は続けられた。

交流戦②

爆発音が森の中を駆け巡る。

パンダと釘崎野薔薇は完全な劣勢に立たされていた。人数差もあるが敵の背後から的確に行われる援護射撃には木を遮蔽に逃げ回るしか択がなかった。

本来ならば１ｏｎ１になるはずだったｖｓメカ丸＋西宮桃＋αの禪院真依は完全に禪院真依のせいで２ｏｎ３として成立してしまっている。

ライフルの弾が切れた瞬間に全弾構築術式で精製すること計２回。上手く２人とも避ける。パンダは一撃いいのが入ったが未だピンピン。釘崎野薔薇に至っては髪の毛それなりに吹き飛ばされて額に切り傷を作っているのにスコープから見えるその反骨心剥き出しの瞳は変わらない。

そろそろイラついてきた。後方でぶっぱなすのも木がこれだけあれば段々と難しくなる。

スナイパーライフルを投げ捨てバズーカをダメ押しの様に射出してから新たな銃を創り出す。

片手にショットガン、もう片方には連射型のハンドガン。足を止めさせる事を考え中身はどちらもゴムの拡散弾。

木の上から飛び降りれば呪力を身に纏い走り出す。呪力は減ってきたものの、以前の呪力量を知っている身からしたら幾らでも身体の奥底から溢れてくるように感じるほどには余裕がある。

腰打ちでも当たるラインまで突っ込めば不意打ちのように釘崎野薔薇の目の前に姿を表す。

ガチャリ。銃を突き出し顔面から腹、脚まで弾を浴びせようと引き金を引いたが聞こえたのは銃身がズレ落ち地面に落ちた音。目を横に向ければ踵ごと脚が降ってくる所だった。

「っ〟ぐ　！なんでここに居るのよ真希！」

「あ？私が居ちゃアダメか？」

空ぶった踵は地面を砕き陥没させる。限界まで呪力で全身を強化

した真依ですらギリギリでしか目が追い付けないフィジカルギフテッドの完成版。呪力感知に引っかからない純０％の呪力量はこれ程厄介なものか。

霞と真希が戦闘を開始してまだ1分ちょっと。三輪霞を速攻でリタイアさせてからは、行きがけに呪霊を祓い爆音轟く場所に向かって走ってきた真希。真依はこれ程早く三輪が負けることを想定できていなかった。

真依もやられてばかりでは無い。左手には創ったフルオートのマシンガン、右手には懐に隠し持っていた使い慣れた拳銃。ガン・カタの様にはいかないがネットから拾い上げた情報を元にそれらしい動きは出来る様になっていた。

ただ、今回ばかりは相手が悪い。銃に意識を割いているうちに懐まで入り込まれ、刀の柄頭で鳩尾に一撃を受けた。息が出来なくなったタイミングで流れるように両手首を捻りあげられながら背負い投げられた。首筋に刃突き付けられて勝負は決する。

「ごホっ＝！か、は…ぁ＝…！」

身体から全ての酸素が外に出たまま帰ってこない。辛うじて銃は手放さなかったがそれも無意味に近い。勝手にポケットに手突っ込まれて携帯取り出されてるのに、何も出来てないのがいい証拠である。

こうして三輪、真依は真希の手によってリタイアさせられたのである。

ばっ！と周囲を見渡す真希、空にゆっくりと広がる見覚えしか無い滲みの様な黒色。事前に説明を受けていない帳が貼られてゆく。この異変は教員他が見ている室内でも察知されていた。

「天元様の元に向かう。悟と歌姫、巡は他の生徒の保護。いいな！」

「ほら、おじいちゃん。散歩のお時間ですよ。お昼ご飯はもう食べたでしょう。」

「花御、か。しょっぴいて制服1着分弁償させてやる。ついでに薪にでもすれば有効活用できそうだしな。」

何であれ、帳が降りる前にあの中へ。なんて走っていれば気の抜けた声で五条先生から帳は完成していると云う真実が語られる。

洒落臭いと須佐能乎の剣で切りつけようとも切った端から元通りになってしまう。何処かに帳を構築している楔があるのだろうと追加で五条先生は語る。

例の如く五条先生は弾かれ、他は入れる……と思いきや二重の帳が張られていた。ぽつぽつと五条先生と一緒に帳に入れず締め出された巡。2人で笑いながら写輪眼と六眼で帳の破り方を探るばかり。これは時間がかかりそうだ。

交流戦③

「五条先生を物理的にぶん殴れる方法ってあるんすか？今のままだと多分ぶん殴るより先にぶった斬っちゃいません？」
「そりゃそうだ。僕最強だから出来ない…なんてのは巡の剣があるから言えないか。ある事はあるよ～。僕の術式をどうにかすれば良い。無効化したり乱したり。昔なら不意打ちも選択肢に入ったけど今はなっしんぐ！」
「なんにせよ術式は相手にしなきゃならんと。」
「そーゆー事。巡は領域展開出来るんでしょ？なら領域展延も術式の対抗策にも入ってくる。出来るはずだしやってみたら？」
「後でちゃんと教えてくださいよ？」

２月。百鬼夜行も片付き高専の復旧も終わりに近付いた頃の校庭での会話である。その後理論と効果諸々は習ったがちゃんと実践を見てもらったことは無かった。今の今まで。
学年が上がったり、担任が変わったりと五条悟と千葉巡は気軽に会える程度の距離感にはなれていなかった。
今の担任に聞いても使えないと言うし、五条先生は自分の任務と１年の世話で大変だからといつの間にやら頭の端に追いやられていたのだ。
領域展延の主な効果は自らの身体の周りに領域の性質の膜を創り満たす事による領域効果の中和。簡単に言ってしまえば相手の術式を中和し無効化する術である。
その代わりに発動している間自らの生得術式は使用できないといったデメリットも含まれる。
さて、これを巡が発動した場合どうなるか。

記憶の端に追いやっていたソレを引っ張り出すことに成功する。

五条先生なら何れ解析して解除出来るかもしれないが自分は厳しい。故に何でもできそうなら試してみようと行動に移す。
「五条先生、ちょっと時間貰います。」
「おっけー。」
帳の前で構築していた須佐能乎を解除すれば帳とも、五条先生とも少し距離をとる。
領域展開、それを自らの身体の形に押し固める。簡単にいえばそれまでだが難易度は高い。集中力を最大限に高め呪力をイメージ通りに形作る。
須佐能乎の様に鎧を纏い、その中を水の様に領域の性質を持つモノで満たす。数分で完成した巡の領域展延。その雰囲気の変わり様に五条先生は態々巡の方に六眼を向けた。
白い羽織に謎の錫杖。黒球達が背中に張り付くように回りながら付随し、極めつけは眼とその身に纏う呪力では無い何かに大きく目を見開く。
そう、身体の周りを領域の性質である自然エネルギーで満たす事により擬似的に六道仙人モードを発動する事に成功したのだ。
額には布が巻かれ第三の目は開かれていないもの両眼は既に輪廻眼と成っている。生得術式は使い物にならなくともこれら全て瞳の固有能力に過ぎない。
ゆっくりと浮かび上がり帳の真上まで浮かび上がれば、五条先生もそれに続くように真横に転移してきた。
「巡の生得領域って面白いよね？」
「木しか無いとこですよあそこ。皆もそんなもんでしょうけど。」
「僕のは先ず物質なんかないけどね。後で色々聞くとして、どうやって帳を破壊する？」
「帳を構築している楔は見えたのでそれを破壊するだけですね。『畜生道・六道口寄せの術』見えるあの杭みたいなやつ全部破壊してこい。」
生得術式は使っていない。これこそが六道の便利なシステム。口寄せ主体の畜生道から他に五つある輪廻眼に備わった基本能力。本

来ならば領域展開発動時で無ければ発動出来なかったこれらも領域展延時には使用することが出来るようになった。
空中に口寄せの陣が現れたと思えば大きな煙が立ち、収まったと思えば両目が輪廻眼で構成されている頭が2つの巨大な犬と同じ程度の大きさのカメレオンが口寄せされる。
巡からの命令が発せられれば犬は奔り、カメレオンは空間に溶ける。他の案の方が早かったりはするのだがこれが他の生徒や先生を巻き込みかねない故の判断。「天道・地爆天星」で地面ごと根こそぎ粉砕して星にしてしまう案も考えたが多分それをすると地図が変わらざる得ない。
「この輪廻眼は産まれた時から縛られているみたいで、普通は使えないんですよ。俺が領域展開を習得した時に初めて開眼したのでそれが条件かなぁと思ってたんですけど…多分違いますね。【自然エネルギーを眼に通した時のみ使用可能】かな？」
五条先生の眼は誤魔化せないなぁと横目に見つつ、簡単に説明をする。領域展延の性質上巡の身体の周りには常に領域の性質で満たされている。故に自然エネルギーで満ちている事と同等であり、巡の身体は自然エネルギーを無理なく吸収出来る身体に仕上がっている。
求道玉や羽織は一緒に現れた付属品。輪廻眼を揃え条件付きではあるが第三の輪廻写輪眼も持つ巡だからこそ現れたとも言える。
見た目で帳が上がることが分かる数秒前に帳が完全に破壊されたのが輪廻眼により確認される。
用済みである口寄せ獣を解除すれば片手にある錫杖をクルクル回して一応の間合いや感覚を馴染ませる。反撃の時間…では無く蹂躙の時間。五条悟と千葉巡、特級の括りすら嘲笑うような二人が戦場を俯瞰する。
「うんうん、悠仁もちゃんとパワーアップしてるね。あそこは悠仁、真希、葵に任せて良さそうだね。じゃ僕はこっち、巡はあっちだ。」
指を刺された先には歌姫先生と見た事の無い呪詛師。五条先生が向かう先は楽巌寺学長の元。瞬時に転移できる五条先生においてけぼりにされながら真っ直ぐトップスピードで歌姫先生の所へ向かっ

ていった。